

令和5（2023）年

植物防疫年報

令和6（2024）年3月

栃木県農業環境指導センター

目 次

第1章 病虫害発生予察事業等植物防疫関連事業の具体的内容

- 1 病虫害発生予察事業…………… 1
- 2 指定有害動植物等発生予察効率化の推進…………… 1
- 3 病虫害侵入調査…………… 1
- 4 病虫害防除員の設置…………… 2

第2章 病虫害発生予察事業

- 1 対象作物と有害動植物の種類…………… 3
- 2 病虫害発生予察情報の提供
 - 1) 病虫害発生予察情報（令和5(2023)年1月～令和5(2023)年12月）…………… 4
 - 2) 病虫害発生予察データ…………… 5
 - 3) 病虫害発生予報…………… 6
 - 4) いちご病虫害情報…………… 38
 - 5) 病虫害発生予察特殊報…………… 63
 - 6) 植物防疫ニュース（速報）等…………… 65
- 3 主要農作物病虫害の発生状況と原因解析（令和4(2022)年度確定）
 - 1) 普通作物…………… 85
 - 2) 野菜…………… 87
 - 3) 果樹…………… 92
 - 4) 花き…………… 93
- 4 病虫害発生程度別面積
 - 1) 令和4(2022)年度病虫害発生程度別面積（確定）…………… 94
 - 2) 令和5(2023)年病虫害発生程度別面積（速報）…………… 97
- 5 病虫害診断結果…………… 100
- 6 病虫害侵入調査…………… 119

第3章 予察調査

- 1 病虫害発生予察調査における地域区分図
 - 1) 市町と県地域区分図…………… 120
 - 2) 農業振興事務所担当地域区分図…………… 120
- 2 予察調査ほ場及び乾式予察灯等の設置状況
 - 1) 普通作物病虫害発生予察ほ場…………… 121
 - 2) 野菜病虫害発生予察ほ場…………… 123
 - 3) 果樹、花き病虫害発生予察ほ場…………… 126
 - 4) 乾式予察灯設置状況…………… 127
 - 5) フェロモントラップ設置状況…………… 128
 - 6) 粘着板設置状況…………… 130
- 3 各種調査結果
 - 1) 水稲病虫害調査結果

(1)	病虫害発生予察ほ場における病虫害の発生状況	131
(2)	育苗箱における病害の発生状況	137
(3)	再生稲における黄萎病、縞葉枯病の発生状況	137
(4)	アメダスデータによるいもち病感染好適日の出現状況	138
(5)	大麦におけるヒメトビウンカ生息密度	140
(6)	ウンカ類、ヨコバイ類の越冬前密度	141
(7)	ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の経年変化	142
(8)	イネミズゾウムシの発生状況	143
(9)	イネドロオイムシの発生状況	145
(10)	ニカメイガの発生状況	145
(11)	病虫害発生予察ほ場における害虫発生状況（すくいとり調査）	148
(12)	斑点米カメムシ類の発生状況	150
(13)	水稻害虫の60W予察灯による誘殺数	159
(14)	ヒメトビウンカの黄色粘着板による誘殺数	165
2)	麦類病害調査結果	
(1)	病害発生予察ほ場における病虫害年次別発生状況	167
(2)	麦類縞萎縮病発生状況	167
(3)	赤かび病発生状況	167
3)	大豆病虫害調査結果	
(1)	病虫害発生予察ほ場における病虫害発生状況	168
(2)	病虫害発生予察ほ場における被害粒発生状況	171
(3)	吸実性カメムシ類のフェロモントラップによる誘殺数	172
(4)	コガネムシ類の60W予察灯による誘殺数	175
4)	野菜類病虫害調査結果	
(1)	いちご	177
(2)	トマト	178
(3)	なす	179
(4)	きゅうり	180
(5)	にら	181
(6)	ねぎ	182
(7)	たまねぎ	183
(8)	キャベツ	184
(9)	レタス	185
5)	果樹類病虫害調査結果	
(1)	なし	186
(2)	ぶどう	187
(3)	りんご	188
6)	花き類病虫害調査結果	
(1)	きく	189
7)	その他調査結果	
(1)	カメムシ類のフェロモントラップによる誘殺数（斑点米カメムシ類除く）	191
(2)	チョウ類のフェロモントラップによる誘殺数（ニカメイガ除く）	194

(3) 有翅アブラムシ類の黄色粘着板による誘殺数	209
(4) アザミウマ類の青色粘着板による誘殺数	211
4 主要農作物生育、作柄の概要	
1) 農作物生育状況	
(1) 普通作物	214
(2) 野菜	218
(3) 果樹	221
(4) 花き	222
2) 気象経過	223
3) 気象表	225
第4章 発生予察効率化調査	
1 薬剤感受性検定	
1) いちごに発生したナミハダニの薬剤感受性検定結果	227
第5章 農薬安全対策事業	
1 農薬安全使用推進事業	
1) 危害防止運動の推進	233
2) 農薬管理指導士等認定講習会の開催	233
3) 農作物等病害虫雑草防除指針の作成	233
4) 農薬販売者及び農薬使用者の取締状況	233
第6章 栃木県農業環境指導センターの概要及び沿革	
1 組織体制	235
2 業務内容	235
3 沿革	236

※本誌掲載の地図は『白地図 KenMap』を使用して作成しました。

第1章 病虫害発生予察事業等植物防疫関連事業の具体的内容

1 病虫害発生予察事業

植物防疫法第23条（国の発生予察事業）及び同法第31条（都道府県の発生予察事業）に基づき、指定有害動植物及び重要病虫害を対象として発生予察を行い、精度の高い発生予察情報の提供に努めた。

1) 指定有害動植物及び県重要病虫害の発生予察

指定有害動植物103種及び重要病虫害50種（いずれも類を含む）を対象に、乾式予察灯4か所、定点調査ほ202か所（水稲39か所、麦20か所、大豆15か所、果樹類25か所、野菜類92か所、きく6か所）及び巡回調査ほ等を定期的に調査するとともに、病虫害防除員、関係機関等との連携による現地情報や各種気象情報等を総合的に分析検討し、農作物の病虫害発生予察を行った。

2) 病虫害発生予察情報の提供

「発生予報」を毎月1回提供したほか、「特殊報」を1回発表した。また、県独自の情報として「いちご病虫害情報」を毎月1回、「植物防疫ニュース」（速報）を11回発表した（令和5年1月～令和5年12月）。

これらすべての情報は「ホームページ」及び電子メールを活用し、関係機関・団体・生産者等に対し、迅速に提供した。

2 指定有害動植物等発生予察効率化の推進

精度の高い予察情報の提供と適正な病虫害防除を推進するため、発生予察手法の高度化や各種の調査を実施した。

1) 薬剤感受性（抵抗性）調査

①いちごに発生したナミハダニの薬剤感受性検定結果

3 病虫害侵入調査

我が国未発生又は我が国の一部のみが発生している重要病虫害侵入を早期に発見するため、28種の病虫害の調査を行った。

4 病害虫防除員の設置

植物防疫法第33条に基づき、病害虫防除所の業務に関する現地情報及び協力を得るため、病害虫防除員（27名）を委嘱し、フェロモントラップを活用した害虫発生状況調査等を実施した。

令和5（2023）年度病害虫防除員設置状況

No	市町村名	フェロモントラップ							対象作物
		ニカメイガ	クモヘリカメムシ	ホソヘリカメムシ	チャバネアオカメムシ	ハスモンヨトウ	オオタバコガ	ナシヒメシンクイ	
1	宇都宮市				○				なし
2	上三川町	○							水稲
3	上三川町						○		いちご
4	鹿沼市					○			いちご
5	日光市			○					大豆
6	芳賀町					○			大豆
7	小山市					○			いちご
8	矢板市				○				りんご
9	矢板市		○						水稲
10	那須烏山市				○				なし
11	大田原市					○			大豆・いちご
12	那須町						○		なす
13	佐野市				○				なし
14	益子町			○					大豆
15	茂木町		○						水稲
16	市貝町	○							水稲
17	真岡市						○		なす
18	栃木市					○			トマト
19	下野市	○							水稲
20	壬生町						○		なす
21	野木町					○			みずな
22	さくら市			○					大豆
23	塩谷町					○			にら
24	高根沢町							○	なし
25	那珂川町						○		トマト
26	那須塩原市			○					大豆
27	足利市					○			いちご

第2章 病虫害発生予察事業

1 対象作物と有害動植物の種類

指定: 指定有害動植物(国の発生予察事業) 重要: 重要病害虫(県の発生予察事業)

対象作物名	種類	病 害 虫 名
稲	指定	イネミズゾウムシ、コブノメイガ、セジロウンカ、ツマグロヨコバイ、トビイロウンカ、ニカメイガ、斑点米カメムシ類「ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ」、ヒメトビウンカ、フタオビコヤガ、稲こうじ病、いもち病、縞葉枯病、ばか苗病、もみ枯細菌、紋枯病、イネドロオイムシ、苗立枯病、ごま葉枯病、白葉枯病
	重要	イチモンジセセリ、イナゴ類、イナズマヨコバイ、黄萎病、苗立枯細菌病
麦	指定	赤かび病、うどんこ病、さび病類
	重要	縞萎縮病、斑葉病、黒節病
大豆	指定	アブラムシ類、吸蜜性カメムシ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、マメシンクイガ、フタスジヒメハムシ、紫斑病
	重要	コガネムシ類、シロイチモジマダラメイガ、べと病
なし	指定	アブラムシ類、シンクイムシ類、ハダニ類、ハマキムシ類、カメムシ類、黒斑病、黒星病、カイガラムシ類、赤星病
	重要	-
ぶどう	指定	晩腐病、灰色かび病、べと病、アザミウマ類
	重要	ハマキムシ類、黒とう病、アブラムシ類、ハダニ類
りんご	指定	シンクイムシ類、ハダニ類、ハマキムシ類、黒星病、斑点落葉病
	重要	アブラムシ類、輪紋病、褐斑病、赤星病
トマト	指定	アザミウマ類、アブラムシ類、コナジラミ類、ハスモンヨトウ、疫病、灰色かび病、葉かび病、黄化葉巻病、すすかび病、うどんこ病
	重要	ハモグリバエ類、タバコガ類、モザイク病、青枯病、萎凋病
きゅうり	指定	アザミウマ類、アブラムシ類、コナジラミ類、ハスモンヨトウ、ハダニ類、うどんこ病、褐斑病、灰色かび病、べと病、炭疽病、斑点細菌病
	重要	ハモグリバエ類、疫病、黄化えそ病、モザイク病
なす	指定	アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、オオタバコガ、灰色かび病、うどんこ病、すすかび病
	重要	コナジラミ類、ハモグリバエ類、タバコガ類、半身萎凋病、青枯病
いちご	指定	アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、うどんこ病、炭疽病、灰色かび病、コナジラミ類
	重要	萎黄病
キャベツ	指定	アブラムシ類、ハスモンヨトウ、コナガ、ヨトウガ、モンシロチョウ、黒腐病、菌核病
	重要	ヨトウムシ類
レタス	指定	アブラムシ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、オオタバコガ、ヨトウガ、灰色かび病、菌核病
	重要	軟腐病
たまねぎ	指定	アザミウマ類、白色疫病、べと病
	重要	さび病、黒斑病、ボトリチス葉枯病、灰色かび病、アブラムシ類、ネギハモグリバエ
ねぎ	指定	アザミウマ類、アブラムシ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、黒斑病、さび病、べと病、ハモグリバエ類、ネギコガ
	重要	萎縮病、軟腐病、葉枯病
にら	指定	-
	重要	アザミウマ類、ネダニ類、白斑葉枯病、軟腐病、さび病
きく	指定	アザミウマ類、アブラムシ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、白さび病、ハダニ類
	重要	-
作物共通	指定	オオタバコガ(トラップ・なす・レタス)、シロイチモジヨトウ(いちご・きく・大豆・なす・レタス、ねぎ)、ハスモンヨトウ(トラップ・いちご・きく・キャベツ・きゅうり・大豆・トマト・なす・ねぎ・レタス)、ヨトウガ(キャベツ・レタス)、コナガ(トラップ・キャベツ)、果樹カメムシ類(トラップ・なし)、リンゴコカクモンハマキ(トラップ)
	重要	-
		指定有害動植物 総計 15作物 計103種(類を含む)
		重要病害虫 総計 16作物 計 50種()

※ Pトラップ=フェロモントラップ

2 病害虫発生予察情報の提供

1) 病害虫発生予察情報（令和5(2023)年1月～令和5(2023)年12月）

種類	発表回数	号数	備考（発表日、表題）			
発生予報	12回	第10号 (5年度) ～第9号	1月20日	2月17日	3月17日	4月21日
			5月19日	6月23日	7月21日	8月25日
			9月22日	10月19日	11月17日	12月22日
特殊報	1回	第1号	にらにおけるフシダニ科の一種の発生について（9月1日発表）			
いちご 病害虫情報	12回	第8号 (4年度) ～第7号	1月20日	2月17日	3月17日	4月21日
			5月19日	6月23日	7月21日	8月25日
			9月22日	10月19日	11月17日	12月22日

種類	回数	号数	表題
植物防疫 ニュース	11回	第13号	タマネギベと病の発生に注意しましょう
		第1号	麦類の赤かび病を適期に防除しましょう！
		第2号	クビアカツヤカミキリの早期発見・防除に努めましょう！
		第3号	ヒメトビウンカ防除により、イネ縞葉枯病の被害を抑えましょう！
		第4号	りんご斑点落葉病は早期からの防除を！
		第5号	斑点米カメムシ類の動向に注意しましょう！
		第6号	イチゴ炭疽病、萎黄病の発生に注意しましょう！
		第7号	斑点米カメムシ類の発生に注意しましょう！
		第8号	トマト黄化葉巻病、トマト黄化病の発生に注意しましょう！
		第9号	ハスモンヨトウ・オオタバコガの被害発生に注意しましょう
		第10号	イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の調査結果について

2) 病害虫発生予察データ

(1) BLASTAMIによる葉いもち感染好適日の判定結果

対象作物	調査地点（気象庁観測点名）	調査期間
稲	那須、黒磯、大田原、塩谷、真岡、宇都宮、今市、鹿沼、小山、佐野	6～8月

(2) 害虫の誘殺数（センター調査）

対象作物	害虫名	調査方法	調査地点	調査期間
稲	ニカメイガ	フェロモントラップ	宇都宮市、小山市	5～8月
	クモヘリカメムシ	フェロモントラップ	宇都宮市、芳賀町	6～9月
	ツマグロヨコバイ	60W予察灯 （白熱灯）	大田原市、宇都宮市、小山市、 栃木市	5～9月
	ヒメトビウンカ			
	アヒゲホリミドリカマキリ等			
大豆	ホソヘリカメムシ	フェロモントラップ	宇都宮市、芳賀町、栃木市	5～9月
大豆・野菜	ハスモンヨトウ	フェロモントラップ	宇都宮市、栃木市	4～11月
果樹	チャバネアオカメムシ	フェロモントラップ	宇都宮市、芳賀町	4～9月
	ナシヒメシンクイ	フェロモントラップ	宇都宮市、芳賀町、 那須烏山市	3～10月
	リンゴコクモンハマキ	フェロモントラップ	宇都宮市、那須烏山市	5～10月
野菜・花き	オオタバコガ	フェロモントラップ	宇都宮市、栃木市	4～11月
	コナガ	フェロモントラップ	宇都宮市、栃木市	4～11月
	有翅アブラムシ類	黄色粘着板	宇都宮市、栃木市 大田原市	4～11月 4～10月
	アザミウマ類	青色粘着板	宇都宮市、栃木市、 大田原市、真岡市、下野市	4～11月 4～10月

(3) 害虫の誘殺数（病害虫防除員等調査）

対象作物	害虫名	調査方法	調査地点	調査期間
稲	ニカメイガ	フェロモントラップ	上三川町、市貝町、下野市	5～8月
	クモヘリカメムシ	フェロモントラップ	茂木町、矢板市	6～8月
大豆	ホソヘリカメムシ	フェロモントラップ	日光市、益子町、さくら市、 那須塩原市	5～9月
大豆・野菜	ハスモンヨトウ	フェロモントラップ	鹿沼市、芳賀町、小山市、 大田原市、栃木市、 野木町、塩谷町、足利市	6～10月
野菜	オオタバコガ	フェロモントラップ	上三川町上三川、 真岡市茅塚、壬生町壬生乙、 那珂川町久那瀬、那須町稲沢	6～10月
果樹	チャバネアオカメムシ	フェロモントラップ	宇都宮市、矢板市、 那須烏山市、佐野市	5～9月
	ナシヒメシンクイ	フェロモントラップ	高根沢町	4～10月

3) 病害虫発生予報

令和4(2022)年度 病害虫発生予報 第10号

令和5(2023)年1月20日
栃木県農業環境指導センター

天候を考慮した適切なハウス管理で、病害虫の発生を抑えましょう。

予想期間 1月下旬～2月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（平年比81%：ほ場率、平年比150%：株率）。(±)
・ 向こう1か月の気温は低く、降水量、日照時間はほぼ平年並の見込み。(±)
- (3) 対 策 ・ 多湿条件において発生しやすいので、下葉を除去し株元の風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
・ 軟弱徒長すると発生しやすくなるので、温度管理やかん水を適切に行う。
・ 発生初期のうちに、アフェットフロアブル(RACコード F:7)等を葉裏にもよくかかるように散布する。
・ 曇雨天時にはくん煙剤を使用する。

2 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（平年比95%：ほ場率、平年比167%：株率）。(±)
・ 向こう1か月の平均気温は低く、日照時間はほぼ平年並の見込み。(±)
- (3) 対 策 ・ 花を良く観察して、観察した花の1割以上にアザミウマ類が見られる場合には、カウンター乳剤(I:15)等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [防除のポイントNo.19](#)、[アザミウマ薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センター(HP)に掲載中

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（平年比86%：ほ場率、平年比61%：株率）。(±)
・ 向こう1か月の平均気温は低く、日照時間はほぼ平年並の見込み。(±)
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・ 天敵導入ほ場ではハダニ類の生息状況等をよく観察し、必要に応じて追加放飼を検討する。
・ 化学農薬に対する感受性低下が起りやすいため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。厳寒期の気門封鎖剤全面散布は、天敵に対して影響があるので注意する。
・ 葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：**少ない**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は少ない（平年比0%：ほ場率、株率）。(-)
・ 向こう1か月の気温は低く、降水量、日照時間はほぼ平年並の見込み。(±)
- (3) 対 策 ・ 施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を用いた通風により、結露防止に努める。
・ 発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
・ 発生初期に、セイビアーフロアブル20(F:12)等を葉裏によくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・ [灰色かび病薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。

5 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い（平年比220%：ほ場率、平年比133%：株率)
・ 向こう1か月の平均気温は低く、日照時間はほぼ平年並の見込み。(±)
- (3) 対 策 ・ ウイルスを媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、ハウスの開口部（出入り口、側窓、天窗）に0.4mm目合以下のネットを張り、特に出入り口は二重にする。
・ 黄色粘着板の設置によりコナジラミ類が見られた時はトランスフォームフロアブル(I:4C)等を散布する。
・ ウイルス病(黄化葉巻病)発病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。

- ・ 耐病性品種であっても、ウイルス病に感染すると伝染源となるため、感受性品種と同様に適正な防除をする。
- (4) 備考
- ・ [防除のポイントNo.22](#)、[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。
 - ・ タバココナジラミは黄化葉巻病 (TYLCV)、黄化病 (ToCV) を媒介する。オンシツコナジラミは黄化病 (ToCV) を媒介する。

6 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠
- ・ 現在の発生量は平年並 (平年比 105% : ほ場率、平年比 88% : 株率)。(±)
 - ・ 向こう 1 か月の平均気温は低く、日照時間はほぼ平年並の見込み。(±)
- (3) 対策
- ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
 - ・ 葉裏をよく観察し、発生が認められたら下葉や葉裏にもよくかかるようにていねいに気門封鎖剤やダニオーテフロアブル (I:33) 等を散布する。

7 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
いちご	灰色かび病	少	少	トマト	うどんこ病	多	多
	アブラムシ類	やや多	やや多		黄化葉巻病	平年並	平年並
きゅうり	べと病	やや少	やや少		すすかび病	平年並	平年並
	うどんこ病	平年並	平年並	にら	白斑葉枯病	少	少
	褐斑病	平年並	平年並		乾腐病	多	多
	コナジラミ類	少	少				

○冬期のスクミリンゴガイ (ジャンボタニシ) 対策について

足利市・小山市・野木町の排水路等でスクミリンゴガイの生息が確認されています。スクミリンゴガイが見られている地域では、水稲作へ向けて越冬密度を下げる以下の対策を行いましょう。

- ・ 耕うんを行い物理的に破壊するとともに寒風にさらす
- ・ 水路の泥上げにより、越冬場所をなくし越冬個体を減らす

[スクミリンゴガイに注意しましょう](#)を当センターHPに掲載中。

○外来害虫トマトキバガについて

令和3 (2021) 年 11 月、外来害虫の本種が国内で初確認されました。令和5 (2023) 年 1 月現在、12 県で発生が確認されています。栃木県における発生は確認されていませんが、飛翔による分散や苗類等を介して本県での発生が懸念されます。発生が疑われる場合はお近くの農業振興事務所又は当センターまで御連絡ください。

「[トマトキバガに注意!](#)」を当センターHPに掲載中です。

○果樹の整枝・せん定作業時には、罹病枝除去に留意しましょう。

農業は適正に使用しましょう

- 農薬は、容器のラベルをよく読んで適正に使用し、農薬の飛散 (ドリフト) にも注意しましょう。
- 花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。
- 薬剤防除では、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

1 か月気象予報 (予報期間 1 月 21 日から 2 月 20 日 1 月 19 日気象庁発表)

向こう 1 か月の気温は低いでしょう。降水量、日照時間はほぼ平年並の見込みです。期間の前半は気温がかなり低くなる見込みです。

向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)

項目	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	60	30	10
降水量	30	30	40
日照時間	30	40	30

詳しくは農業環境指導センター (Tel 028-626-3086) までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせは、ツイッター「[栃木県農政部 \(@tochigi_nousei\)](#)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。



令和4(2022)年度 病害虫発生予報 第11号

令和5(2023)年2月17日
栃木県農業環境指導センター

病害は予防、虫害は初期防除を基本とした管理を行いましょ。

予想期間 2月下旬～3月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比36%：ほ場率、平年比0%：株率)。(一～±)
・向こう1か月の降水量は少なく、日照時間は多い見込み。(一)
- (3) 対 策 ・多湿条件において発生しやすいため、下葉(老化葉等)を除去し株元や花房の風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
・発病した葉や果実、果梗等は伝染源となるため、速やかに取り除き、施設外で処分する。
・予防を主体に、セイビアーフロアブル20(RACコード F:12)等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・[灰色かび病薬剤感受性結果①、②](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は多い(平年比194%：ほ場率、平年比500%：株率)。(+)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は多い見込み。(一)
- (3) 対 策 ・多湿条件において発生しやすいため、下葉(老化葉等)を除去し株元や花房の風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
・発生初期のうちに、パンチョ TF 顆粒水和剤(F:U06、F:3)等を葉裏にもよくかかるように散布する。
・曇雨天時にはくん煙剤を使用する。硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるため、天敵導入ほ場では長時間のくん煙処理は避ける。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比63%：ほ場率、平年比75%：株率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は多い見込み。(+)
- (3) 対 策 ・葉裏をよく観察し、増殖する前に初期防除を行う。
・天敵導入ほ場では、ハダニ類の発生状況をよく観察し、必要に応じて追加放飼を検討する。
・化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
・葉かき後は薬剤がかかりやすいため、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・[ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比77%：ほ場率、平年比125%：株率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は多い見込み。(+)
- (3) 対 策 ・低密度のうちにベネビア OD(I:28)等を散布する。
・花を良く観察して、観察した花の1割以上にアザミウマ類の寄生が見られる場合は、被害が大きくなる可能性があるため、速やかにスピノエース顆粒水和剤(I:5)等を散布する。
・なお、本剤はカブリダニ等の天敵に影響があるため注意する。
- (4) 備 考 ・[防除のポイントNo.19](#)、[アザミウマ薬剤感受性検定結果①、②](#)を当センターHPに掲載中。

5 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比36%：ほ場率、平年比15%：株率)。(一～±)
・向こう1か月の降水量は少なく、日照時間は多い見込み。(一)
- (3) 対 策 ・多湿条件で多発するので、適正なかん水と換気を行う。多湿時は循環扇や暖房機等を用いた通風により、施設内の湿度を下げる。
・発病した葉や果実、花卉等は伝染源となるため、速やかに取り除き施設外で処分する。
・発生状況に応じてピクシオ DF(F:17)等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・[薬剤感受性検定結果①、②](#)を当センターHPに掲載中。

6 トマト うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 抛 ・現在の発生量は多い（平年比 233%：ほ場率、平年比 983%：株率）。（+）
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は多い見込み。（-）
- (3) 対 策 ・過繁茂にならないよう葉かきをこまめに行い、通風と日当たりを改善する。
・予防を主体に、サンヨール(F:M01)等を葉裏にもよくかかるように散布する。

7 きく 白さび病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 抛 ・現在の発生量はやや多い（平年比 182%：ほ場率、平年比 133%：株率）。（+）
・向こう1か月の降水量は少なく、日照時間は多い見込み。（-）
- (3) 対 策 ・多湿条件で多発するので、適正なかん水と換気を行う。多湿時は循環扇や暖房機等を用いた通風により、施設内の湿度を下げる。
・予防を主体にジマンダイセンプロアブル(F:M03)等を散布する。

8 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
いちご	アブラムシ類	やや多	多	トマト	コナジラミ類	やや多	多
きゅうり	うどんこ病	やや多	平年並	にら	白斑葉枯病	平年並	やや少
	べと病	やや多	平年並	きく	ハダニ類	やや少	平年並
	コナジラミ類	多	多				

○ かんしょ サツマイモ基腐病

本病は栃木県での発生は確認されていませんが、令和5(2023)年2月現在、全国30都道県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。

健全な種苗の導入及び発病株の早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。

[サツマイモ基腐病に注意を!](#)を当センターHPに掲載中です。

○ 水稻の種子伝染性病害の対策について

種子消毒を適切に行い、使用する床土や育苗箱、育苗器などの育苗資材・器具もしっかり消毒することで、苗立枯病や種子伝染性病害の発生を防止しましょう。

近年、特に育苗期間中の高温が原因と思われる病害（もみ枯細菌病、苗立枯細菌病など）の発生が多くなっていますので、育苗ハウスなどの適正な温湿度管理にも留意しましょう。

○ 冬期のスクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）対策について

足利市・小山市・野木町の排水路等でスクミリンゴガイの生息が確認されています。スクミリンゴガイが見られている地域では、水稻作へ向けて越冬密度を下げる以下の対策を行いましょう。

- ・耕うんを行い物理的に破壊するとともに寒風にさらす
- ・水路の泥上げにより、越冬場所をなくし越冬個体を減らす

[スクミリンゴガイに注意しましょう](#)を当センターHPに掲載中。

農薬は適正に使用しましょう

- 農薬は、容器のラベルをよく読んで適正に使用し、農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう。
- 花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。
- 薬剤防除では、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

1か月気象予報（予報期間2月18日から3月17日 2月16日気象庁発表）

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、高い確率50%です。降水量は、少ない確率40%です。日照時間は、多い確率40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	20%	30%	50%
降水量	40%	30%	30%
日照時間	30%	30%	40%

詳しくは農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jpnn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。



令和4(2022)年度 病害虫発生予報 第12号

令和5(2023)年3月17日
栃木県農業環境指導センター

気温の上昇に伴う病害虫の発生増加に注意しましょう。

予想期間 3月下旬～4月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 ・発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比61%：ほ場率、平年比67%：株率)。(±)
・向こう1か月の降水量は多く、日照時間は少ない見込み。(+)
- (3) 対 策 ・多湿条件において発生しやすいので、下葉を除去し株元や花房の風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
・発病した果実や果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
・発生初期に、フルピカフロアブル(RACコードF:9)等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [灰色かび病薬剤感受性結果①](#)、[②](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 いちご アブラムシ類

- (1) 発生予想 ・発生量： **多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い(平年比164%：ほ場率、平年比191%：株率)。(±～+)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は少ない見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・発生が見られる場合は、ベネビアOD(I:28)等を散布する。
・ほ場内外の雑草は増殖源となるので、除草する。

3 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 ・発生量： **平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比44%：ほ場率、平年比47%：株率)。(－～±)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は少ない見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・低密度のうちにベネビアOD(I:28)等を散布する。
・花を良く観察して、観察した花の1割以上にアザミウマ類の寄生が見られる場合は、被害が大きくなる可能性があるため、速やかにディアナSC(I:5)等を散布する。なお、本剤はカブリダニ等の天敵に影響があるため注意する。
- (4) 備 考 ・ [防除のポイントNo.19](#)、[アザミウマ類感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。

4 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 ・発生量： **平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比46%：ほ場率、平年比35%：株率)。(－～±)
・向こう1か月の降水量は多く、日照時間は少ない見込み。(+)。00
- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を用いた通風により、施設内の湿度低下に努める。
・発病葉、発病果や花弁は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
・発生初期に、フルピカフロアブル(F:9)等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [灰色かび病薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。

5 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 ・発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比91%：ほ場率、平年比133%：株率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は少ない見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・施設内に黄色粘着板を設置し、コナジラミ類の誘殺を認めたらディアナSC(I:5)等を散布するなど、早期防除に努める。
・コナジラミ類は黄化葉巻病(TYLCV)や黄化病(ToCV)を媒介する。これらの発病株は伝染源となるので、速やかに抜き取り、施設外で処分する。耐病性品種であっても、感染すると伝染源となるので、感受性品種と同様に適正な防除をする。
- (4) 備 考 ・ [防除のポイントNo.22](#)、[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

6 たまねぎ べと病

- (1) 発生予想 ・発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並（平年比 216%：ほ場率）。(±)
・向こう1か月の降水量は多く、日照時間は少ない見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・雨水が停滞すると発生しやすくなるので、ほ場の排水をよくする。
・発病株は伝染源となるので、速やかに抜き取り、ほ場外で処分する。
・予防を主体に、ジマンダイセン水和剤（F:M3）等を散布する。発生が見られる場合は、ホライズンドライフロアブル（F:11、F:27）等を散布する。
・[植物防疫速報 No. 13](#) を当センターHP に掲載中。

7 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 ・発生量： **多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い（平年比 155%：ほ場率、平年比 64%：株率）。(±～＋)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は少ない見込み。(±～＋)
- (3) 対 策 ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・葉裏をよく観察し、発生が認められたら気門封鎖剤やトクチオン乳剤（I:1）等を下葉や葉裏にもよくかかるように散布する。

8 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
いちご	うどんこ病	やや少	平年並	きゅうり	うどんこ病	平年並	やや多
	ハダニ類	やや少	平年並		べと病	やや多	多
トマト	うどんこ病	多	多		コナジラミ類	多	多
きく	白さび病	少	やや少		アザミウマ類	少	やや少

春の病害虫防除対策

○麦類 赤かび病

赤かび病は予防が重要です。出穂や開花の状況をよく観察して、適期に赤かび病防除を行いましょう。

○いちご親株床

親株に病害虫の発生がないかよく確認してから定植しましょう。また、本ぼと親株床の管理作業を分け、本ぼから親株床への病害虫の持ち込みを避けましょう。

○なし 黒星病

一次伝染時期となるりん片脱落期から開花後は最重要防除期です。本年の幸水の開花は平年より8日早く、昨年より6日早い予想となっています。果そう基部病斑（芽基部病斑）の摘み取りを徹底し、2分咲きから落花直後に予防効果の高いDMI剤を散布しましょう。[ナシ黒星病菌の簡易薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

農薬は適正に使用しましょう

- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。
- RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

1か月気象予報（予報期間3月18日から4月17日 3月16日気象庁発表）

期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。降水量は、多い確率50%です。日照時間は、少ない確率50%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	10%	10%	80%
降水量	20%	30%	50%
日照時間	50%	30%	20%

詳しくは農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部 \(@tochigi_nousei\)](#)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。



令和5(2023)年度 病害虫発生予報 第1号

令和5(2023)年4月21日
栃木県農業環境指導センター

気温の上昇、多湿に伴う病害虫の発生に注意しましょう！

予想期間 4月下旬～5月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比42%：ほ場率、平年比25%：株率)。(一～±)
・向こう1か月の平均気温は平年並または低く、日照時間は平年並または少ない見込み。(一～±)
- (3) 対 策 ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・気門封鎖剤を活用するとともに、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布し、抵抗性の発達を抑制する。
・苗による本ぼへの持込みを防ぐため、育苗時の防除を徹底する。また、親株床での発生を防ぐため作業は本ぼ作業の前、もしくは別に行う。
- (4) 備 考 ・[ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比87%：ほ場率、平年比115%：株率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は平年並または低く、日照時間は平年並または少ない見込み。(一～±)
- (3) 対 策 ・花を良く観察して、観察した花の1割以上にアザミウマ類が見られる場合には、スピノエース顆粒水和剤(RACコードI:5)等を散布する。
- (4) 備 考 ・[防除のポイントNo.19](#)、[アザミウマ薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。

3 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比129%：ほ場率、平年比157%：株率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は平年並または低く、日照時間は平年並または少ない見込み。(一～±)
- (3) 対 策 ・施設内外の除草を徹底する。
・黄色粘着板を設置し、発生状況の把握に努める。発生が見られた場合には、トランスフォームフロアブル(I:4C)等で防除する。
・生育に応じて葉かきを行い、幼虫を除去する。除去した葉は放置せず、ポリ袋等で密閉して完全に枯死・死滅させてから処分するか、土中に埋める。
- (4) 備 考 ・[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 きゅうり べと病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は多い(平年比213%：ほ場率、平年比345%：株率)。(+)
・向こう1か月の降水量は平年並みまたは多く、日照時間は平年並または少ない見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・多湿条件で多発するので、適正なかん水と換気を行う。
・草勢低下は発生を助長させるので、適正な肥培管理を行う。
・予防を主体に銅剤やダコニール1000(F:M5)等を散布する。発病が見られるほ場では、治療効果のあるリドミルゴールドMZ(F:M3, F:4)等を散布する。
- (4) 備 考 ・[キュウリべと病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 たまねぎ べと病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は多い(平年比196%：ほ場率、平年比1155%：株率)。(+)
・向こう1か月の平均気温は平年並または低く、降水量は平年並または多く、日照時間は平年並または少ない見込み。(±)
- (3) 対 策 ・雨水が停滞すると発生しやすくなるので、ほ場の排水をよくする。
・予防を主体にダコニール1000(F:M5)を散布する。発生が見られる場合は、ザンプロDMフロアブル(F:45, F:40)等を散布する。
・曇雨天が続くと予想される場合には、降雨前に薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・気温15℃前後で雨が多いと発生が多くなりやすい。
・[植物防疫ニュースNo.13\(タマネギべと病\)](#)を当センターHPに掲載中。

6 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
いちご	うどんこ病	やや多	やや多	きゅうり	うどんこ病	平年並	平年並
トマト	灰色かび病	やや少	平年並		褐斑病	やや多	やや多
	うどんこ病	多	多	たまねぎ	黒斑病	少	やや少
					アザミウマ類	平年並	平年並

○ 水稻の移植時期における病害虫対策

箱施用剤を使用し、いもち病や紋枯病等の病害やウンカ類、イネミズゾウムシ、イネドロオウムシ等の害虫の発生を抑制しましょう。特に常発地、多発地では、積極的に使用しましょう。

○ 麦類赤かび病

麦類の生育は平年に比べ、二条大麦が7～10日程度、六条大麦及び小麦が3～5日程度早く進んでいるので、出穂や開花状況をよく観察して、適期防除を行いましょう。

[植物防疫ニュース No. 1（麦類の赤かび病を適期に防除しましょう！）](#)を当センターHPに掲載中です。

○ いちご親株床

本ぽと親株床の管理作業を分け、本ぽからの病害虫の持ち込みを避けましょう。

○ なし 黒星病

果そう基部病斑（芽基部病斑）の摘み取りを徹底し、治療効果があるDMI剤を散布しましょう。昨年多発したほ場では、芽基部病斑が多くなる可能性があるため、特に注意が必要です。また、開花期から展葉初期に降雨が多く、開花から2週間以内に黒星病の発生が散見される場合は、多発の危険があるので注意しましょう。

[ナシ黒星病菌の簡易薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中です。

○ かんしょ サツマイモ基腐病

本病は栃木県内での発生は確認されていませんが、令和5（2023）年4月現在、全国31都道県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。

健全な種苗を導入するとともに、発病株が発生した場合は早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。

[サツマイモ基腐病に注意！](#)を当センターHPに掲載中です。

農薬は適正に使用しましょう

- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。
- RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。
- 4月～6月は「春の農作業安全確認運動」の実施期間です。

1か月気象予報（予報期間4月22日から5月21日 4月20日気象庁発表）

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	40%	40%	20%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	40%	40%	20%



Instagramはじめました。

農作物病害虫図鑑@とちぎ

センター所蔵の病害虫画像をInstagram上で公開しています。

主要病害虫から珍しい種まで、定期的に更新中！

#栃木県#病害虫図鑑 検索&フォローよろしくお願ひします！

詳しくは農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」

農業環境指導センターホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。

令和5(2023)年度 病害虫発生予報 第2号

令和5(2023)年5月19日
栃木県農業環境指導センター

収穫終了後の適切な残さ処分により、次作での病害虫発生を抑えましょう！

予想期間 5月下旬～6月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稲 縞葉枯病(ヒメトビウンカ媒介)

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 昨年10月の再生稲調査での本病の発生は平年並(平年比104%：ほ場率、平年比47%：株率)。(±)
・ 昨年11月のウンカ類の越冬前幼虫の発生量はやや少なく、ウイルスの保毒虫率はやや少ない(県平均2.1%)。(－)
・ 向こう1か月の平均気温は高い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 昨年発生の多かった地域では、本田期防除を実施する。
- (4) 備 考 ・ 県内の保毒虫率は低下傾向であるが、気象条件によってはヒメトビウンカの発生量が増える場合があるので、引き続き注意する。
・ [令和4\(2022\)年度植物防疫ニュースNo.12](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 麦類 赤かび病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い(平年比179%：ほ場率)。(＋)
・ 向こう1か月の降水量は平年並、日照時間は少ない見込み。(±～＋)
- (3) 対 策 ・ 開花・出穂期での発生がない場合でも、不稔粒発生や曇雨天などによって登熟期後半に多発することがある。今年は県中南部において既に赤かび病の発生が確認されているので、ほ場をよく確認し、追加防除を行う。
- (4) 備 考 ・ [令和5\(2023\)年度植物防疫ニュースNo.1](#)を当センターHPに掲載中。

3 いちご(親株) ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 本ほにおける4月の発生量はやや少なかった。(－)
・ 向こう1か月の平均気温は高い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 本ほで薬剤抵抗性を発達させたハダニ類を親株に持ち込まないために、本ほ作業後に親株の管理作業を行わない。
・ 雑草はハダニ類の発生源になるので、ほ場内外の除草を徹底する。
・ 気門封鎖剤や天敵製剤を活用することで、作全体の化学農薬の散布回数を減らし薬剤感受性の低下を防ぐ。なお、気門封鎖剤は5日程度の間隔をおき、複数回散布する。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 きゅうり ベと病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い(平年比130%：ほ場率、平年比236%：株率)。(＋)
・ 向こう1か月の降水量は平年並、日照時間は少ない見込み。(±)
- (3) 対 策 ・ マルチの被覆、適切な植栽間隔、換気などにより過湿防止につとめる。
・ 発病葉や被害残さは、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
・ 草勢低下は発生を助長させるので、適正な肥培管理を行う。
・ 発生初期に、ジャストフィットフロアブル(RACコードF:43, F:40)等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [キュウリベと病菌薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 野菜類・花き類 アブラムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ 5月第1半旬までの黄色粘着板への成虫の誘殺数はやや多い。(＋)
・ 向こう1か月の平均気温は高い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 雑草はアブラムシ類の発生源になるので、ほ場内外の除草を徹底する。
・ 施設栽培では開口部に防虫ネットを張り、アブラムシ類の侵入を防ぐ。
・ 発生初期から薬剤を散布する。薬剤感受性の低下を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- (4) 備 考 ・ アブラムシ類は病原ウイルスを媒介するので注意する。

6 果樹 カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・ 現在のフェロモントラップへの誘殺数はやや少ない。(－)
・ 昨年のヒノキの球果量は多かった。(＋)
- (3) 対 策 ・ 夜温が下がらない蒸し暑い日の日没後に飛来が多い。こまめに園内を観察し、飛来が認められたら防除する。
・ 4mm 目合い以下の多目的防災網で園全体を被覆し、被害を防止する。
- (4) 備 考 ・ 山林に隣接したほ場や、過去に被害が大きかったほ場では特に注意する。

7 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
トマト	灰色かび病	平年並	平年並	きゅうり	コナジラミ類	多	多
	葉かび病	平年並	平年並	なし	黒星病	少	少
	うどんこ病	平年並	平年並		アブラムシ類	やや少	平年並
	コナジラミ類	やや多	やや多		シンクイムシ類	やや多	やや多
きゅうり	灰色かび病	少	少	きく	ハダニ類	やや少	平年並
	褐斑病	やや多	やや多	野菜類	アザミウマ類	やや多	多

○施設栽培の病害虫

- トマト、きゅうり、いちご等の施設栽培では、栽培終了時にハウスの密閉蒸し込みを行うなど、施設内の害虫を野外へ「出さない」対策を徹底しましょう。特に、タバココナジラミはトマト黄化葉巻病 (TYLCV) を媒介し、ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病 (MYSV) を媒介するため、注意が必要です。

○ウメ・モモ・スモモ・サクラ等 クビアカツヤカミキリ (特定外来生物)

- 暖かくなると幼虫の動きが活発になるため、フラス(木くず)の排出が盛んになります。県内での発生地域は拡大傾向にあるので、これまで発生が確認されていない園地においても見回りを行いましょう。発見時には農業環境指導センターまで御連絡ください。
- [クビアカツヤカミキリ注意喚起チラシ](#)及び[令和4\(2022\)年度植物防疫ニュース No. 2](#)を当センターHPに掲載中。

○かんしょ サツマイモ基腐病

- 本病は栃木県内での発生は確認されていませんが、令和5(2023)年5月現在、全国31都道県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。
- 健全な種苗を導入するとともに、発病株が発生した場合は早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。
- [サツマイモ基腐病に注意!](#)を当センターHPに掲載中です。

農薬は適正に使用しましょう

- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。
- RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。
- 4月～6月は「春の農作業安全確認運動」の実施期間です。

1か月気象予報 (予報期間5月20日から6月19日 5月18日気象庁発表)

天気は数日の周期で変わるでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並の確率40%です。日照時間は、少ない確率40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)

項目	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気 温	20%	30%	50%
降 水 量	30%	40%	30%
日照時間	40%	30%	30%



Instagramはじめました。

農作物病害虫図鑑@とちぎ

センター所蔵の病害虫画像をInstagram上で公開しています。

主要病害虫から珍しい種まで、定期的に更新中！

#栃木県#病害虫図鑑 検索&フォローよろしくお願いします！

詳しくは農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部 \(@tochigi_nousei\)](#)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。



令和5(2023)年度 病害虫発生予報 第3号

令和5(2023)年6月23日
栃木県農業環境指導センター

天気の移り変わりに伴う病害虫発生量の変化に注意しましょう。

予想期間6月下旬～7月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稲 いもち病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並。(一～土)
・ BLASTAM(6月中旬)に感染好適条件が連続的に出現した。(+)
- (3) 対 策 ・ 葉いもちの初発時期(6月中下旬)以降、ほ場をよく見回り、早期発見に努める。
・ 発生が見られる場合は、ダブルカットフロアブル(F:16.1、24)等、予防・治療効果のある薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・ [BLASTAM\(いもち病発生時期予測システム\)](#)の情報、[いもち病薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 水稲 縞葉枯病(ヒメトビウンカ媒介)

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 6月第2半旬までの黄色粘着板への成虫の誘殺数は平年並。(土)
・ 令和5年5月に実施した、大麦におけるヒメトビウンカ第一世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルスの県平均保毒虫率はやや低い(平年比49%)。(一～土)
- (3) 対 策 ・ 昨年発生の多かった地域では、本田期防除を実施する。
- (4) 備 考 ・ 県内の保毒虫率は低下傾向であるが、コシヒカリなど縞葉枯病に抵抗性を持たない品種を作付けした常発地域では、引き続き注意する。
・ [令和5\(2023\)年度植物防疫ニュースNo.3](#)を当センターHPに掲載中。

3 いちご(親株床・育苗) 炭疽病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(平年比138%：ほ場率)。(土)
向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並。(土～+)
- (3) 対 策 ・ ほ場をよく見回り、発病株や感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分する。
・ 水滴の飛散等で伝染するので、できるだけ水の跳ね返りのないかん水を行う。
・ 発病してからの防除は困難なので、ベルコートフロアブル(RACコードF:M7)等を定期的に散布するなど、予防を主体とした対策を行う。
- (4) 備 考 ・ [病害虫防除対策のポイント\(イチゴ炭疽病\)](#)、[薬剤感受性検定結果\(QoI剤\)](#)を当センターHPに掲載中。

4 トマト うどんこ病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**やや少ない**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は少ない。(一)
向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並。(土～+)
- (3) 対 策 ・ 密植を避け、葉かきをこまめに行い通風と日当たりを改善する。
・ 発生初期のうちに、アフエットフロアブル(F:7)等を葉裏にもよくかかるように散布する。

5 野菜類・花き類 アザミウマ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 6月第2半旬までの青色粘着板への成虫の誘殺数は平年並。(土)
・ 現在の発生量は、なすでは平年並、きゅうり及びきくではやや少ない。(一～土)
向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込み。(+)
- (3) 対 策 ・ 雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、ほ場内外を除草する。
・ 施設栽培では開口部に赤色防虫ネット等を張り、アザミウマ類の侵入を防ぐ。
・ 発生初期から薬剤を散布する。薬剤感受性の低下を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- (4) 備 考 ・ アザミウマ類はウイルス病(きゅうり：キュウリ黄化えそ病、きく：キクえそ病等)を媒介するので、適切に防除する。
・ [アザミウマ類薬剤感受性検定結果、検定結果\(続報\)](#)を当センターHPに掲載中。

6 りんご 斑点落葉病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は多い（平年比 1253%：ほ場率）。（+）
 ・ 向こう 1 か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並。（±）
- (3) 対 策 ・ 定期的に予防散布を行い、耐性菌発生防止のため RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
 ・ 発生が確認されたらナリア WDG (F:11, F:7) 等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [令和 5 \(2023\) 年度植物防疫ニュース No. 4](#) を当センターHP に掲載中。

7 なし シンクイムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・ ナシヒメシンクイ第一世代成虫の誘殺数はやや多い。（+）
 ・ 有効積算温度から推測した、県内各地域におけるナシヒメシンクイ第二世代成虫の発生ピークは 7 月第 2 半旬頃の見込み。（±～+）
- (3) 対 策 ・ 卵及び食入前のふ化幼虫を対象に薬剤散布を行うと効果が高いので、第二世代成虫の発生ピーク直後を目安に薬剤散布を行う。
 ・ 発生及び食害状況に応じてエクシレル SE (I:28) 等により防除を行う。
 ・ 果実や新梢に食害が見られた場合は速やかに摘果またはせん除を行い、ほ場外に持ち出して適切に処分する。
- (4) 備 考 ・ [ナシヒメシンクイの誘殺数グラフ](#) を当センターHP に掲載中。

8 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
いちご	ハダニ類	平年並	やや多	なし	黒星病	やや少	やや少
トマト	灰色かび病	少	少	果樹類	果樹カメムシ類	やや少	平年並
野菜類	アブラムシ類	平年並	やや多	さく	白さび病	少	少
	ハスモンヨトウ	平年並	やや多		ハダニ類	平年並	平年並

○施設栽培の病害虫

- ・ トマト、きゅうり、いちご等の施設栽培では、栽培終了時にハウスの密閉蒸し込みを行うなど、施設内の害虫を野外へ出さない対策を徹底しましょう。特に、タバココナジラミはトマト黄化葉巻病 (TYLCV) を媒介し、ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病 (MYSV) を媒介するため、注意が必要です。

○うめ・もも・すもも・さくら クビアカツヤカミキリ（特定外来生物）

- ・ クビアカツヤカミキリが樹木に寄生すると、幹や枝から、明るい色でうどん状のフラス（幼虫が排出する、木くずと糞が混じったもの）が大量に排出されます。うめ、もも、すもも、さくら等の樹木からフラスが出ているのを見つけたら、農業環境指導センターまで御連絡ください。
- ・ [注意喚起チラシ](#) 及び [令和 5 \(2023\) 年度植物防疫ニュース No. 2](#) を当センターHP に掲載中です。

○かんしょ サツマイモ基腐病

- ・ 本病は栃木県内での発生は確認されていませんが、令和 5 (2023) 年 6 月現在、全国 31 都道県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。
- ・ 健全な種苗の導入及び発病株の早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。
- ・ [サツマイモ基腐病に注意！](#) を当センターHP に掲載中です。

農薬は適正に使用しましょう

- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。
- 6 月～8 月は「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。

1 か月気象予報（予報期間 6 月 24 日から 7 月 23 日 6 月 22 日気象庁発表）

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。向こう 1 か月の平均気温は高い見込みです。降水量及び日照時間はほぼ平年並の見込みです。

向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)

項 目	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気 温	1 0	3 0	6 0
降 水 量	3 0	3 0	4 0
日照時間	4 0	3 0	3 0



Instagram 農作物病害虫図鑑@とちぎ

センター所蔵の病害虫画像をInstagram上で公開しています。
主要病害虫から珍しい種まで、定期的に更新中！
#栃木県#病害虫図鑑 検索&フォローよろしくお願いします！

詳しくは農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せください。
病害虫情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部 \(@tochigi_nousei\)](#)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。



令和5(2023)年度 病害虫発生予報 第4号

令和5(2023)年7月21日
栃木県農業環境指導センター

高温期の病害虫発生に注意しましょう。

予想期間 7月下旬～8月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稻 いもち病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：やや少ない
- (2) 根拠 ・ 現在の発生量はやや少ない(平年比28%：ほ場率、平年比109%：株率)。(－)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量、日照時間はほぼ平年並の見込み。(－～±)
- (3) 対策 ・ ほ場の発生状況を良く観察し、発病が見られた場合、早急にブラシフロアブル(F:16.1、U14)等の予防・治療効果のある薬剤を散布する。
- (4) 備考 ・ [BLASTAM\(いもち病発生時期予測システム\)](#)の情報、[いもち病薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 水稻 紋枯病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根拠 ・ 現在の発生量はやや多い(平年比112%：ほ場率、平年比185%：株率)。(＋)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量、日照時間はほぼ平年並の見込み。(＋)
- (3) 対策 ・ 発生が見られた場合には、穂ばらみ期から出穂期までの間にモンガリット粒剤(F:3)、モンカットフロアブル(F:7)等を散布する。発生が激しい場合は2回目を散布する。

3 水稻 斑点米カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：やや多い
- (2) 根拠 ・ 6月下旬の雑草地におけるすくい取り調査での発生量は平年並(平年比119%：成幼虫数)。(±)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込み。(±～＋)
- (3) 対策 ・ 穂ぞろい期に斑点米カメムシ類が水田内で見られる場合は、乳熟初期(出穂期7～10日後)までにエクシードフロアブル(I:4C)、トレボンEW(I:3A)等を散布する。
・ 防除後も斑点米カメムシ類が見られる場合は、7～10日間隔で1～2回追加散布する。
- (4) 備考 ・ [令和5\(2023\)年度植物防疫ニュースNo.5](#)を当センターHPに掲載中。

4 大豆 吸実性カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：平年並
- (2) 根拠 ・ 7月第1半旬までのフェロモントラップへのホソヘリカメムシ誘殺数はやや少ない。(－)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込み。(±～＋)
- (3) 対策 ・ 開花期の15日後から子実肥大後期(9月下旬)までにトレボン乳剤(I:3A)、スミチオン乳剤(I:1B)等を10～14日間隔で散布する。カメムシ類の発生が多い場合は、追加散布する。

5 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：平年並
- (2) 根拠 ・ 現在の発生量はやや少ない(平年比106%：ほ場率)。(－)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量、日照時間はほぼ平年並の見込み。(＋)
- (3) 対策 ・ 雨よけ栽培を基本とし、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水の跳ね返りのない方法でかん水を行う。
・ 本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗での防除を徹底する。予防を主体に、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
・ 発病株や感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分する。
・ 発病株周辺の株は、発病が認められなくても潜在感染している可能性があるため、早急に取り除きほ場外で適切に処分する。
- (4) 備考 ・ [炭疽病薬剤感受性検定結果](#)、[いちご病害虫情報第2号\(炭疽病\)](#)を当センターHPに掲載中。

6 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：やや多い
- (2) 根拠 ・ 現在の発生量は平年並(平年比122%：ほ場率、平年比145%：株率)。(±)
・ 向こう1か月の気温は高く、日照時間はほぼ平年並の見込み。(＋)
- (3) 対策 ・ 本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗段階での防除を徹底する。
・ 薬剤感受性の低下を防ぐため、気門封鎖剤を活用するとともに、RACコードの異なる薬

剤をローテーション散布する。

- (4) 備考 ・ [ハダニ類薬剤感受性検定結果](#)を当センターHP に掲載中。

7 りんご 斑点落葉病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**多い**
 (2) 根拠 ・ 現在の発生量は多い（平年比336%：ほ場率）。（+）
 ・ 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込み。（±）
 (3) 対策 ・ 定期的に予防散布を行い、耐性菌発生防止のため RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
 ・ 発生が確認されたら、フルーツセイバー（F:7）等を散布する。
 (4) 備考 ・ [令和5\(2023\)年度植物防疫ニュースNo.4](#)を当センターHP に掲載中。

8 果樹 果樹カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**平年並**
 (2) 根拠 ・ 現在のフェロモントラップへの誘殺数はやや少ない。（-）
 ・ 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込み。（±～+）
 (3) 対策 ・ こまめにほ場を観察し、飛来が確認されたら防除する。
 ・ 4mm 目合い以下の多目的防災網で園全体を被覆し、被害を防止する。
 (4) 備考 ・ 山林に隣接したほ場や、過去に被害が大きかったほ場では特に注意する。

9 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
水稲	縞葉枯病	平年並	平年並	野菜類	アザミウマ類	平年並	やや多
トマト	コナジラミ類	平年並	やや多		ハスモンヨトウ	やや少	平年並
きゅうり	べと病	多	多		オオタバコガ	やや多	多
なし	黒星病	平年並	平年並	りんご	褐斑病	やや少	やや少
	シンクイムシ類	平年並	やや多	さく	ハダニ	やや少	平年並

○ほ場内外の除草は害虫防除の基本です！

- 水田周辺の雑草だけでなく、水田内の雑草（ノビエ、イヌホタルイ等）も斑点米カメムシ類の誘引・発生源となります。また、野菜類や花き類でも、ほ場内外の雑草はハダニ類やアザミウマ類、アブラムシ類の温床となります。適切な除草で、害虫が発生しにくい環境を作りましょう。

○うめ・もも・すもも クビアカツヤカミキリ（特定外来生物）

- クビアカツヤカミキリが樹木に寄生すると、幹や枝から、明るい色でうどん状のフラス（幼虫が排出する、木くずと糞が混じったもの）が大量に排出されます。うめ、もも、すもも等からフラスが出ているのを見つけたら、農業環境指導センターまで御連絡ください。
- [クビアカツヤカミキリ注意喚起チラシ](#)及び[令和5\(2023\)年度植物防疫ニュースNo.2](#)を当センターHP に掲載中です。

○かんしょ サツマイモ基腐病

- 本病は栃木県内での発生は確認されていませんが、令和5(2023)年7月現在、全国31都道府県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。
- 健全な種苗の導入及び発病株の早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。
- [サツマイモ基腐病に注意！](#)を当センターHP に掲載中です。

○外来害虫トマトキバガについて

- 南米原産の外来害虫トマトキバガは、令和5(2023)年7月現在、全国17道県で発生が確認されています。栃木県における発生は確認されていませんが、飛翔による分散や苗類等を介して本県での発生が懸念されます。発生が疑われる場合はお近くの農業振興事務所、又は農業環境指導センターへ御連絡ください。
- [トマトキバガに注意！](#)を当センターHP に掲載中です。

農薬は適正に使用しましょう

- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。
- 6月～8月は「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。

1か月気象予報（予報期間7月22日から8月21日 7月20日気象庁発表）

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は高い見込みです。降水量及び日照時間はほぼ平年並の見込みです。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	10	20	70
降水量	40	30	30
日照時間	30	30	40



NOUGYO_KSC_TOCHIGI

Instagram 農作物病害虫図鑑@とちぎ

センター所蔵の病害虫画像をInstagram上で公開しています。
主要病害虫から珍しい種まで、定期的に更新中！

#栃木県#病害虫図鑑 検索&フォローよろしくお願いします！

詳しくは農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部 \(@tochigi_nousei\)](https://twitter.com/tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。



令和5(2023)年度 病害虫発生予報 第5号

令和5(2023)年8月25日
栃木県農業環境指導センター

病害虫の発生動向を注意深く観察し、適期防除を徹底しましょう。

予想期間8月下旬～9月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稲 いもち病(穂いもち)

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや少ない**
- (2) 根 拠 ・ 8月上旬の葉いもち(上位葉)の発生量は平年並(平年比68%：ほ場率、平年比55%：株率)。(±)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多く、日照時間は少ない見込み。(～±)
- (3) 対 策 ・ ほ場の発生状況を良く観察し、葉いもちの発病が見られる場合は、穂いもちに進展しないよう早急にブラシフロアブル(RACコードF:16.1、U14)等、予防・治療効果のある薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・ [BLASTAM\(いもち病発生時期予測システム\)](#) 情報、[いもち病QoI剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 水稲 斑点米カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 8月上旬の水田におけるすくい取り調査での発生頭数は平年並(平年比85%：成幼虫数)。(±)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・ 出穂期の薬剤防除後も発生が多い場合は、7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。
- (4) 備 考 ・ [植物防疫ニュース\(速報No.7\)](#)を当センターHPに掲載中。

3 大豆 ベと病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(平年比83%：ほ場率、平年比40%：株率)。(±)
・ 品種「里のほほえみ」は、べと病が発生しやすい。(+)
・ 向こう1か月の平均気温は高く、降水量は平年並か多い見込み(+)
- (3) 対 策 ・ 開花10日前から子実肥大期にザンプロDMフロアブル(F:45、40)、ベトファイター顆粒水和剤(F:27、40)等を散布する。

4 大豆 吸蜜性カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや少ない**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや少ない(平年比77%：ほ場率)。(－)
・ 8月第1半旬までのフェロモントラップによるホソヘリカメムシ総誘殺数はやや少ない。(－)
・ 8月第1半旬までの予察灯へのアオクサカメムシ誘殺数はやや少ない。(－)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・ 開花期の15日後から子実肥大後期(9月下旬)までにトレボン乳剤(I:3A)、スミチオン乳剤(I:1B)等を10～14日間隔で散布する。

5 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや少ない(平年比57%：ほ場率、平年比100%：株率)。(－)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 症状が出てからの防除は困難なので、予防を主体にRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。苗による本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗期の防除を徹底する。
・ 水滴の飛散等で伝染するので、点滴かん水を行い、頭上かん水を避ける。
・ 発病株周辺の株は、発病が認められなくても潜在感染している可能性があるため、定植苗として使用しない。
・ 発病株を見つけたら早急に取り除き、施設外に持ち出し適切に処分する。
- (4) 備 考 ・ [植物防疫ニュース\(速報No.6\)](#)、[炭疽病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

6 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（平年比 117%：ほ場率、平年比 162%：株率）。(±)
 ・ 向こう 1 か月の気温は高く、日照時間は少ない見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・ 定植前の農薬炭酸ガス処理等によりハダニを徹底防除し、本ぼへの持込みを防ぐ。
 ・ 育苗期後半～定植当日にモベントフロアブル(I:23)をかん注する。なお、天敵を導入するほ場では、天敵への影響日数（45 日）に注意して使用する。
 ・ 抵抗性発達防止のため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- (4) 備 考 ・ [いちごに発生したナミハダニの薬剤感受性検定結果](#)を当センターHP に掲載中。

7 ねぎ 黒斑病・葉枯病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（両病害合計で平年比 107%：ほ場率、平年比 7%：株率）。(±)
 ・ 向こう 1 か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 多湿条件で発生しやすいため、秋雨期や曇雨天が続く場合は発生に注意する。

8 なし ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（平年比 119%：ほ場率、平年比 83%：葉率）。(±)
 ・ 向こう 1 か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
 ・ 化学農薬に対する感受性低下が著しいため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ雌成虫及び卵に対する主要薬剤の殺虫効果](#)を当センターHP に掲載中。

9 りんご 斑点落葉病・褐斑病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は、斑点落葉病で多く（平年比 292%：ほ場率、平年比 400%：葉率）、褐斑病でやや多い（平年比 221%：ほ場率、平年比 125%：葉率）。(＋)
 ・ 向こう 1 か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 定期的に予防散布を行い、耐性菌発生防止のため RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- (4) 備 考 ・ [植物防疫ニュース（速報 No. 4）](#)を当センターHP に掲載中。

10 大豆・野菜類・花き類 オオタバコガ

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 8 月第 1 半旬までのフェロモントラップへの誘殺数はやや多い。(＋)
 ・ 向こう 1 か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・ 施設栽培では、開口部に防虫ネット等を張り、侵入を防ぐ。
 ・ 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期に薬剤を散布する。

11 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
水稻	紋枯病	平年並	やや多	野菜類	ハダニ類	平年並	やや多
大豆	紫斑病	—	やや少		ハスモンヨトウ	平年並	やや多
きゅうり	べと病	多	多	果樹類	カメムシ類	少	やや少
大豆・野菜類	アブラムシ類	平年並	やや多	きく	ハダニ類	やや少	平年並
野菜類	アザミウマ類	平年並	やや多		白さび病	少	やや少

○トマト黄化葉巻病 (TYLCV) の防除対策

- TYLCV はタバココナジラミによって媒介されます。夏秋トマトで黄化葉巻病が発生したほ場では、施設の蒸し込みを行うなど、残さに寄生している媒介虫を施設外に「出さない」対策を徹底しましょう。

○トマト・なす等 トマトキバガ

- 外来害虫である本種の国内における確認報告が相次いでおり、8 月現在、23 道県で発生が確認されています。栃木県における発生は確認されていませんが、飛翔による分散や苗類等を介して本県での発生が懸念されます。発生が疑われる場合はお近くの農業振興事務所もしくは農業環境指導センターへ御連絡ください。
- [注意喚起チラシ](#)を当センターHP に掲載中です。

農薬は適正に使用しましょう

- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。
- 6月～8月は「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。

1か月気象予報（予報期間8月26日から9月25日 8月24日気象庁発表）

期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。天気は数日の周期で変わるでしょう。向こう1か月の平均気温は高い確率80%です。降水量は平年並または多い確率ともに40%、日照時間は少ない確率40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	10%	10%	80%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	40%	30%	30%

詳しくは農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せください。

病虫害情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部 \(@tochigi_nousei\)](https://twitter.com/tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。



令和5(2023)年度 病害虫発生予報 第6号

令和5(2023)年9月22日
栃木県農業環境指導センター

高い気温が予想されるため秋冬作物の病害虫発生に注意しましょう！

予想期間 9月下旬～10月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや少ない(平年比30%：ほ場率、平年比24%：株率)。(－～±)
・ 向こう1か月の気温は高く、日照時間はほぼ平年並の見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・ 化学農薬に対する感受性低下が起りやすいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しにくい気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。
・ 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいので、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 トマト コナジラミ類(黄化葉巻病(TYLCV))

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在のコナジラミ類の発生は少ないが、一部のほ場では黄化葉巻病の発生が確認されている。(±)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量、日照時間はほぼ平年並の見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・ ウイルスを媒介するタバココナジラミの侵入を防ぐため、ハウスの開口部(出入り口、側窓、天窗)に0.4mm目合以下のネットを張り、特に出入り口は二重にする。
・ 黄色粘着板の設置により、コナジラミ類の早期発見に努める。発生が見られた場合は、コルト顆粒水和剤(RACコードI:9B)等を散布する。
・ 発病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
・ 耐病性品種であっても、本病に感染すると伝染源となるため、感受性品種と同様に適正な防除を行う。
- (4) 備 考 ・ [令和5\(2023\)年植物防疫ニュースNo.8](#)、[防除のポイントNo.22](#)、[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

3 きゅうり コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(平年比114%：ほ場率、平年比146%：株率)。(±)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量、日照時間はほぼ平年並の見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・ 密度が増加すると防除が困難になるため、ほ場内に黄色粘着板を設置し、早期発見・早期防除を行う。
・ 薬剤感受性の低下を避けるため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
・ ハウスの開口部に0.4mm目合以下のネットを張り、特に出入り口は二重にする。
- (4) 備 考 ・ タバココナジラミは退緑黄化病(CCYV)を媒介する。

4 ねぎ 黒斑病・葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(平年比103%：ほ場率、平年比51%：株率)。(±)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量、日照時間はほぼ平年並の見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・ 発生初期の防除に重点を置く。多湿条件で発生しやすいため、秋雨期や曇雨天が続く場合は発生に注意して防除を行う。
・ 窒素過多は病害が発生しやすいため、適正な肥培管理を実施する。
・ 残さは、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

5 ねぎ ハモグリバエ類

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い(平年比162%：ほ場率)。(＋)
・ 向こう1か月の平均気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込み。(±～+)

- (3) 対 策 ・ ほ場をよく観察し、発生が認められた場合は速やかに防除を行う。
 ・ RAC コードの異なる薬剤をローテーションで散布する。

- (4) 備 考 ・ [令和2\(2020\)年植物防疫ニュース No. 13](#) を当センターHP に掲載中。

6 野菜類(いちご・なす・キャベツ・レタス等)・花き類・大豆 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 9月第2半旬までのフェロモントラップによる誘殺数は平年並。(±)
 ・ 現在の発生量は、いちご及びきくでは少ないが、なす及び大豆では多い。(－～＋)
 ・ 向こう1か月の気温は高く、日照時間はほぼ平年並の見込み。(±～＋)
- (3) 対 策 ・ 定期的にほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
 ・ 幼虫の齢期が進むと被害が大きくなり薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。

7 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
大豆	カメムシ類	多	多	キャベツ・レタス	アブラムシ類	やや少	平年並
トマト	すすかび病	平年並	やや多	りんご	斑点落葉病	多	多
きゅうり	べと病	少	やや少		褐斑病	やや多	やや多
キャベツ・レタス	タバコガ類	平年並	やや多	きく	ハダニ類	平年並	やや多

秋の病害虫防除対策

○水稲 縞葉枯病

- ・縞葉枯病が発生したほ場の再生稲(ひこばえ)は、媒介虫のヒメトビウソカノ増殖源と縞葉枯ウイルスの獲得源になります。早めに丁寧な耕起を行いましょ。

○麦類 種子伝染性病害

- ・近年、オオムギ斑葉病やムギ類黒節病等の種子伝染性病害が発生しています。種子消毒を行うとともに、は種は適期に行いましょ。

○トマト・なす等 トマトキバガ

- ・外来害虫である本種の国内における確認報告が相次いでおり、9月現在、23道県で発生が確認されています。栃木県での発生は確認されていませんが、飛翔による分散や苗類等を介して、本県での発生が懸念されます。発生が疑われる場合は、お近くの農業振興事務所もしくは農業環境指導センターへ御連絡ください。
- ・[注意喚起チラシ](#)を当センターHP に掲載中です。

○いちご 炭疽病・萎黄病

- ・症状が出てからの防除は困難であるため、本ほに持ち込まないことが重要です。本ほで発生が見られた場合、発病及び感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分しましょ。[令和5\(2023\)年植物防疫ニュース\(速報 No. 6\)](#)を当センターHP に掲載中です。

○いちご アザミウマ類

- ・頂花房の開花が10月上旬以前から見られる施設では、秋期からアザミウマ類が発生しやすく、翌年の発生も早まる傾向があるため、適切に防除しましょ。

○なし 黒星病・炭疽病、りんご 斑点落葉病・褐斑病

- ・病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となるため、収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行いましょ。防除の際は周辺へ飛散(ドリフト)しないよう十分注意しましょ。
- ・[令和5\(2023\)年植物防疫ニュース\(速報 No. 4\)](#)、[リンゴ褐斑病薬剤感受性検定結果](#)、[ナシ炭疽病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHP に掲載中です。

○農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょ。

○同一薬剤の連用を避け、異なるRACコードの薬剤をローテーション散布しましょ。

1か月気象予報(予報期間9月23日から10月22日 9月21日気象庁発表)

期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。天気は数日の周期で変わります。平均気温は高い見込みです。降水量、日照時間はほぼ平年並の見込みです。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)

項目	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	10%	10%	80%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	30%	40%



NOUGYO_KSC_TOCHIGI

Instagram 農作物病害虫図鑑@とちぎ

センター所蔵の病害虫画像をインスタグラム上で公開しています。

主要病害虫から珍しい種まで、定期的に更新中！

#栃木県#病害虫図鑑 検索&フォローよろしくお願いします！

詳しくは農業環境指導センター (Tel 028-626-3086) までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはX (旧ツイッター)「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。



令和5(2023)年度 病害虫発生予報 第7号

令和5(2023)年10月19日
栃木県農業環境指導センター

天候を考慮した適切な施設管理により病害虫発生を抑えましょう。

予想期間 10月下旬～11月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：少ない
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は少ない(平年比0%：ほ場率、平年比0%：株率)。(－)
・ 向こう1か月の気温は高く、日照時間は平年並か多い見込み。(－)
- (3) 対 策 ・ 株が軟弱徒長すると発生しやすくなるので、適正な温度管理やかん水を行う。
・ 予防を主体に、バルコートフロアブル(RACコードF：M07)等を使用する。
・ 曇雨天時にはくん煙剤を使用するが、硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるので天敵導入ほ場では長時間のくん煙処理は避ける。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや少ない(平年比23%：ほ場率、平年比20%：株率)。(－)
・ 向こう1か月の気温は高く、日照時間は平年並か多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・ 化学農薬に対する感受性低下が起りやすいため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
・ 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいので、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

3 トマト すずかび病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い(平年比281%：ほ場率、平年比138%：株率)。(＋)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多い見込み。(－)
- (3) 対 策 ・ 施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を用いた通風により、結露防止に努める。
・ 発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
・ 予防を主体に、パレード20フロアブル(F：7)等を葉裏によくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・ [すずかび病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 トマト コナジラミ類(黄化葉巻病(TYLCV))

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・ 現在のコナジラミ類の発生量はやや少ない(平年比90%：ほ場率、平年比8%：葉率)。(－)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ ウイルスを媒介するタバココナジラミの侵入を防ぐため、ハウスの開口部(出入り口、側窓、天窗)に0.4mm目合以下のネットを張り、特に出入り口は二重にする。
・ 黄色粘着板の設置により、コナジラミ類の早期発見に努める。発生が見られた場合アニキ乳剤(I：6)等を散布する。
・ 黄化葉巻病の発病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
・ 黄化葉巻病の耐病性品種であっても、本病に感染すると伝染源となるため、感受性品種と同様に適正な防除を行う。
- (4) 備 考 ・ [令和5\(2023\)年植物防疫ニュースNo.8](#)、[防除のポイントNo.22](#)、[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 きゅうり コナジラミ類(退緑黄化病(CCYV))

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在のコナジラミ類の発生量はやや多い(平年比163%：ほ場率、平年比249%：株率)。(＋)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多い見込み。(＋)

- (3) 対策
 - ・ 密度が増加すると防除が困難になるため、ほ場内に黄色粘着板を設置し、早期発見・早期防除を行う。
 - ・ 薬剤感受性の低下を避けるため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
 - ・ ハウスの開口部に 0.4mm 目合以下のネットを張り、特に出入り口は二重にする。
- (4) 備考
 - ・ タバココナジラミは退緑黄化病(CCYV)を媒介する。 [タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

6 野菜類（いちご、ねぎ等） ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠
 - ・ 10月第1半旬までのフェロモントラップによる誘殺数は平年並。(±)
 - ・ 現在の発生量は、ねぎではやや多く、いちごでは多い。(＋)
 - ・ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多い見込み。(＋)
- (3) 対策
 - ・ 定期的にはほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
 - ・ 幼虫の齢期が進むと被害が大きくなり薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。
- (4) 備考
 - ・ [令和5\(2023\)年植物防疫ニュース No. 8](#)を当センターHPに掲載中。

7 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
いちご	アブラムシ類	やや多	多	にら	白斑葉枯病	少	少
トマト	灰色かび病	少	少	にら	アザミウマ類	平年並	やや多
きゅうり	べと病	やや少	やや少	野菜類	オオタバコガ	やや多	多
ねぎ	ハモグリバエ類	多	多	きく	ハダニ類	やや少	平年並
ねぎ	シロイチモジヨトウ	多	多				

秋の病害虫防除対策

○水稻 縞葉枯病

- ・ 縞葉枯病が発生したほ場の再生稲（ひこばえ）は、媒介虫のヒメトビウンカの増殖源と縞葉枯ウイルスの獲得源になります。早めに丁寧な耕起を行いましょ。

○麦類 種子伝染性病害

- ・ 近年、オオムギ斑葉病やムギ類黒節病等の種子伝染性病害が発生しています。種子消毒を行うとともに、は種は適期に行いましょ。

○トマト・なす等 トマトキバガ

- ・ 外来害虫である本種の国内における確認報告が相次いでおり、10月17日現在、31道府県で発生が確認されています。栃木県での発生は確認されていませんが、飛翔による分散や苗類等を介して、本県での発生が懸念されます。発生が疑われる場合は、お近くの農業振興事務所もしくは農業環境指導センターへ御連絡ください。
- ・ [注意喚起チラシ](#)を当センターHPに掲載中です。

○なし 黒星病、りんご 斑点落葉病・褐斑病

- ・ 病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となるため、収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行いましょ。防除の際は周辺へ飛散（ドリフト）しないよう十分注意しましょ。

○令和5年11月から令和6年1月まで、栃木県の「農業危害防止運動期間」を実施します。農業は適正に管理し、容器のラベルをよく読んで使用し、農薬による事故等の発生を防止しましょ。

1か月気象予報（予報期間 10月21日から11月20日 10月19日気象庁発表）

- ・ 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に2週目は、気温がかなり高くなる可能性があります。
- ・ 高気圧に覆われやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)

項目	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	20%	30%	50%
降水量	40%	40%	20%
日照時間	20%	40%	40%



NOUGYO_KSC_TOCHIGI

Instagram 農作物病害虫図鑑@とちぎ

センター所蔵の病害虫画像をInstagram上で公開しています。
 主要病害虫から珍しい種まで、定期的に更新中！
#栃木県#病害虫図鑑 検索&フォローよろしくお願いします！

詳しくは農業環境指導センター (TEL 028-626-3086) までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはX (旧ツイッター)「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。



令和5(2023)年度 病害虫発生予報 第8号

令和5(2023)年11月17日
栃木県農業環境指導センター

病害虫の早期発見に努め、適切に防除しましょう！

予想期間 11月下旬～12月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：少ない
- (2) 根 拠
- 現在の発生量は少ない(ほ場率：平年比0%、株率：平年比0%)。(－)
 - 向こう1か月の降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。(－)
- (3) 対 策
- 株が軟弱徒長すると発生しやすくなるので、適正な温度管理やかん水を行う。
 - 予防を主体に、フルピカフロアブル(RACコード F:9)等を葉裏にもよくかかるように散布する。
 - 曇雨天時にはくん煙剤を使用するが、硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるので天敵導入ほ場では長時間のくん煙処理は避ける。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠
- 現在の発生量は少ない(ほ場率：平年比18%、株率：平年比9%)。(－)
 - 向こう1か月の気温は高く、日照時間は多いでしょう。(＋)
- (3) 対 策
- ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
 - 化学農薬に対する感受性低下が起これやすいため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
 - 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいので、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
- (4) 備 考
- [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

3 トマト 葉かび病・すすかび病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠
- 葉かび病の現在の発生量は平年並(ほ場率：平年比130%、葉率：平年比50%)。(±)
 - すすかび病の現在の発生量は平年並(ほ場率：平年比126%、葉率：平年比108%)。(±)
 - 向こう1か月の気温は高く、降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。(－)
- (3) 対 策
- 施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を用いた通風により、結露防止に努める。
 - 発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
 - 予防を主体にベルコートフロアブル(F:M07)等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考
- [葉かび病薬剤感受性検定結果](#)、[すすかび病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 トマト 黄化葉巻病(TLCV)(タバココナジラミが媒介)

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠
- 現在の発生量は多い(ほ場率：平年比252%、株率：平年比500%)。(＋)
 - 向こう1か月の気温は高く、日照時間は多いでしょう。(±)
- (3) 対 策
- ウイルスを媒介するタバココナジラミの侵入を防ぐため、ハウスの開口部(出入り口、側窓、天窗)に0.4mm目合以下のネットを張り、特に出入り口は二重にする。
 - 黄色粘着板の設置によりコナジラミが見られた時はディアナSC(I:5)等を散布する。
 - 発病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
 - 耐病性品種であっても、本病に感染すると伝染源となるため、感受性品種と同様に適正な防除をする。
- (4) 備 考
- [防除のポイントNo22](#)、[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 きゅうり ベト病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠
- 現在の発生量は平年並(ほ場率：平年比134%、葉率：平年比135%)。(±)
 - 向こう1か月の気温は高く、降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。(－)

- (3) 対 策 ・ 施設内が多湿にならないよう適切な換気を行うとともにかん水量に注意する。
 ・ 草勢低下は発生を助長させるので、適正な肥培管理を行う。
 ・ 予防を主体にランマンフロアブル(F:21)等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [べと病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

6 きゅうり コナジラミ類 (退緑黄化病 (CCYV))

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量が多い (ほ場率：平年比 215%、株率：平年比 695%)。(+)
 ・ 向こう1か月の気温は高く、日照時間は多いでしょう。(+)
- (3) 対 策 ・ 高密度になると防除が困難になるので、ほ場内に黄色粘着板を設置する等、早期発見・早期防除を行う。
 ・ 化学農薬に対する感受性低下が起りやすいため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
 ・ 施設内外を除草するとともに、ハウスの開口部に0.4mm目合以下のネットを張る等の耕種的防除を徹底する。
- (4) 備 考 ・ タバココナジラミは退緑黄化病(CCYV)を媒介する。[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

7 にら アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い (ほ場率：平年比 147%、株率：平年比 73%)。(+)
 ・ 向こう1か月の気温は高く、日照時間は多いでしょう。(±)
- (3) 対 策 ・ 雑草はアザミウマ類の増殖源となるので、ハウス内外の除草を行う。
 ・ 早期発見に努め、密度が低い時点でスピノエース顆粒水和剤(I:5)等を散布する。

8 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
いちご	灰色かび病	少	少	トマト	灰色かび病	少	少
	アブラムシ類	やや少	平年並	にら	白斑葉枯病	少	少
	コナジラミ類	やや少	平年並	きく	ハダニ類	やや少	平年並

秋の病害虫防除対策

○イネ 縞葉枯病

- ・縞葉枯病が発生したほ場の再生稲(ひこばえ)は、媒介虫のヒメトビウンカの生息場所と縞葉枯ウイルスの獲得源になります。早めに丁寧な耕起を行いましょう。

○トマト・なす等 トマトキバガ

- ・外来害虫である本種の国内における確認報告が相次いでおり、11月15日現在、37道府県で発生が確認されています。栃木県での発生は確認されていませんが、飛翔による分散や苗類等を介して、本県での発生が懸念されます。発生が疑われる場合は、お近くの農業振興事務所もしくは農業環境指導センターへ御連絡ください。
- ・[「トマトキバガに注意！」](#)を当センターHPに掲載中です。

○果樹の整枝・せん定作業時には、罹病枝除去に留意しましょう。

○薬剤防除では、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

○令和5年11月から令和6年1月まで、「栃木県農業危害防止運動」を実施中です。

農薬は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。

1か月気象予報(予報期間11月18日から12月17日 11月16日 気象庁発表)

- ・向こう1か月の気温は、寒気の影響を受けにくいと高いでしょう。
- ・高気圧に覆われやすいため、向こう1か月の降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

項目	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	10	40	50
降水量	50	30	20
日照時間	20	30	50

詳しくは農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはX（旧ツイッター）「栃木県農政部(@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。



NOUGYO_KSC_TOCHIGI

Instagram 農作物病害虫図鑑@とちぎ

センター所蔵の病害虫画像をInstagram上で公開しています。

主要病害虫から珍しい種まで、定期的に更新中！

#栃木県#病害虫図鑑 検索&フォローよろしくお願いします！

令和5(2023)年度 病害虫発生予報 第9号

令和5(2023)年12月22日
栃木県農業環境指導センター

天候の変化に応じた適切な管理で病害虫発生を抑えましょう！

予想期間 12月下旬～1月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：少ない
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は少ない(ほ場率：平成比0%、株率：平成比0%)。(－)
- (3) 対 策 ・ 向こう1か月の気温は高く、降水量、日照時間は、ほぼ平成並の見込み。(±)
- (3) 対 策 ・ 多湿条件において発生しやすいので、下葉を除去し株元の風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
- (3) 対 策 ・ 発病した果実や果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
- (3) 対 策 ・ 予防を主体に、セイビアーフロアブル20(RACコード F:12)等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・ [灰色かび病薬剤感受性結果①、②](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：少ない
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は少ない(ほ場率：平成比0%、株率：平成比0%)。(－)
- (3) 対 策 ・ 向こう1か月の気温は高く、降水量、日照時間は、ほぼ平成並の見込み。(±)
- (3) 対 策 ・ 株が軟弱徒長すると発生しやすくなるので、適正な温度管理やかん水を行う。
- (3) 対 策 ・ 予防を主体に、サンリット水和剤(F:3)等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (3) 対 策 ・ 曇雨天時にはくん煙剤を使用するが、硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるので天敵導入ほ場では長時間のくん煙処理は避ける。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：平成並
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや少ない(ほ場率：平成比35%、株率：平成比28%)。(－)
- (3) 対 策 ・ 向こう1か月の気温は高く、降水量、日照時間は、ほぼ平成並の見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
- (3) 対 策 ・ 化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- (3) 対 策 ・ 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいので、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い(ほ場率：平成比117%、株率：平成比300%)。(＋)
- (3) 対 策 ・ 向こう1か月の気温は高く、降水量、日照時間は、ほぼ平成並の見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 花を良く観察して、観察した花の1割以上にアザミウマ類が見られる場合には、スピノエース顆粒水和剤(RACコード I:5)等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [防除のポイントNo.19](#)、[アザミウマ薬剤感受性検定結果①、②](#)を当センターHPに掲載中。

5 トマト すずかび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ すずかび病の現在の発生量は多い(ほ場率：平成比200%、葉率：平成比300%)。(＋)
- (3) 対 策 ・ 向こう1か月の気温は高く、降水量、日照時間は、ほぼ平成並の見込み。(±)
- (3) 対 策 ・ 施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を用いた通風により、結露防止に努める。
- (3) 対 策 ・ 発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
- (3) 対 策 ・ トリフミン水和剤(F:3)等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・ [すずかび病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

6 トマト 黄化葉巻病 (TYLCV) (タバココナジラミが媒介)

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 抛
- 現在の発生量はやや少ない (ほ場率：平年比 38%、株率：平年比 25%)。(-)
 - 向こう 1 か月の気温は高く、降水量、日照時間は、ほぼ平年並の見込み。(+)
- (3) 対 策
- 黄色粘着板の設置によりコナジラミが見られた時はアニキ乳剤(I:6)等を散布する。
 - 発病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
 - 耐病性品種であっても、本病に感染すると伝染源となるため、感受性品種と同様に適正な防除をする。
- (4) 備 考
- [防除のポイントNo22](#)、[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHP に掲載中。

7 きゅうり ベと病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 抛
- 現在の発生量は平年並 (ほ場率：平年比 173%、葉率：平年比 57%)。(±)
 - 向こう 1 か月の気温は高く、降水量、日照時間は、ほぼ平年並の見込み。(±)
- (3) 対 策
- 施設内が多湿にならないよう適切な換気を行うとともにかん水量に注意する。
 - 草勢低下は発生を助長させるので、適正な肥培管理を行う。
 - 予防を主体にジャストフィットフロアブル(F:43・40)等を散布する。
- (4) 備 考
- [べと病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHP に掲載中。

8 なら 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：**少ない**
- (2) 根 抛
- 現在の発生量は少ない (ほ場率：平年比 0%、株率：平年比 0%)。(-)
 - 向こう 1 か月の気温は高く、降水量、日照時間は、ほぼ平年並の見込み。(±)
- (3) 対 策
- 施設内が多湿にならないよう、日中の気温の高いときを見計らって換気を行う。
 - 捨て刈りした葉は伝染源となるため、施設外に持ち出し、適切に処分する。
 - 発生初期に、セイビアーフロアブル 20 (F:12) 等を散布する。

9 なら ネダニ

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根 抛
- 現在の発生量はやや多い (ほ場率：平年比 103%、株率：平年比 333%)。(+)
 - 向こう 1 か月の気温は高く、降水量、日照時間は、ほぼ平年並の見込み。(+)
- (3) 対 策
- 多発ほ場では、薬剤防除を行う際、栽培スケジュールを十分に考慮し、ネコナカットフロアブル (I:10B) 等を株元かん注する。
 - 作付け終了後に株は集めてほ場外で処分する。

10 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
いちご	アブラムシ類	平年並	やや多	トマト	灰色かび病	少	少
	コナジラミ類	少	やや少	きく	ハダニ類	やや少	平年並

○イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率及び越冬前密度調査結果について

- ヒメトビウンカ越冬世代幼虫を対象とした調査 (11 月実施) の結果、ウンカ類幼虫の生息密度は平年よりやや少ない発生でしたが、イネ縞葉枯ウイルスの県平均保毒虫率は 4.4%と前年より増加しました。再生稲の丁寧な耕起を行い越冬場所をなくしましょう。
- 詳細については、当センターHP に掲載中の[植物防疫ニュースNo.10](#)を御参照ください。

○果樹の病害虫防除対策について

- 整枝・せん定作業時には、罹病枝を取り除くか被害部を削り取り、傷跡に薬剤を塗布しましょう。

農薬は適正に使用しましょう

○令和 5 年 11 月から令和 6 年 1 月まで、「栃木県農薬危害防止運動」を実施中です。

農薬は、容器のラベルをよく読んで適正に使用し、農薬の飛散 (ドリフト) にも注意しましょう。

○花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

○薬剤防除では、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

1か月気象予報（予報期間12月23日から1月22日 12月21日 気象庁発表）

- ・寒気の影響を受けにくいとため、向こう1か月の気温は高い見込みです。
- ・向こう1か月の降水量、日照時間はほぼ平年並の見込みです。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	10	30	60
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

詳しくは農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはX（旧ツイッター）「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g64/index.html>) でもご覧になれます。



NOUGYO_KSC_TOCHIGI

Instagram 農作物病害虫図鑑@とちぎ

センター所蔵の病害虫画像をInstagram上で公開しています。

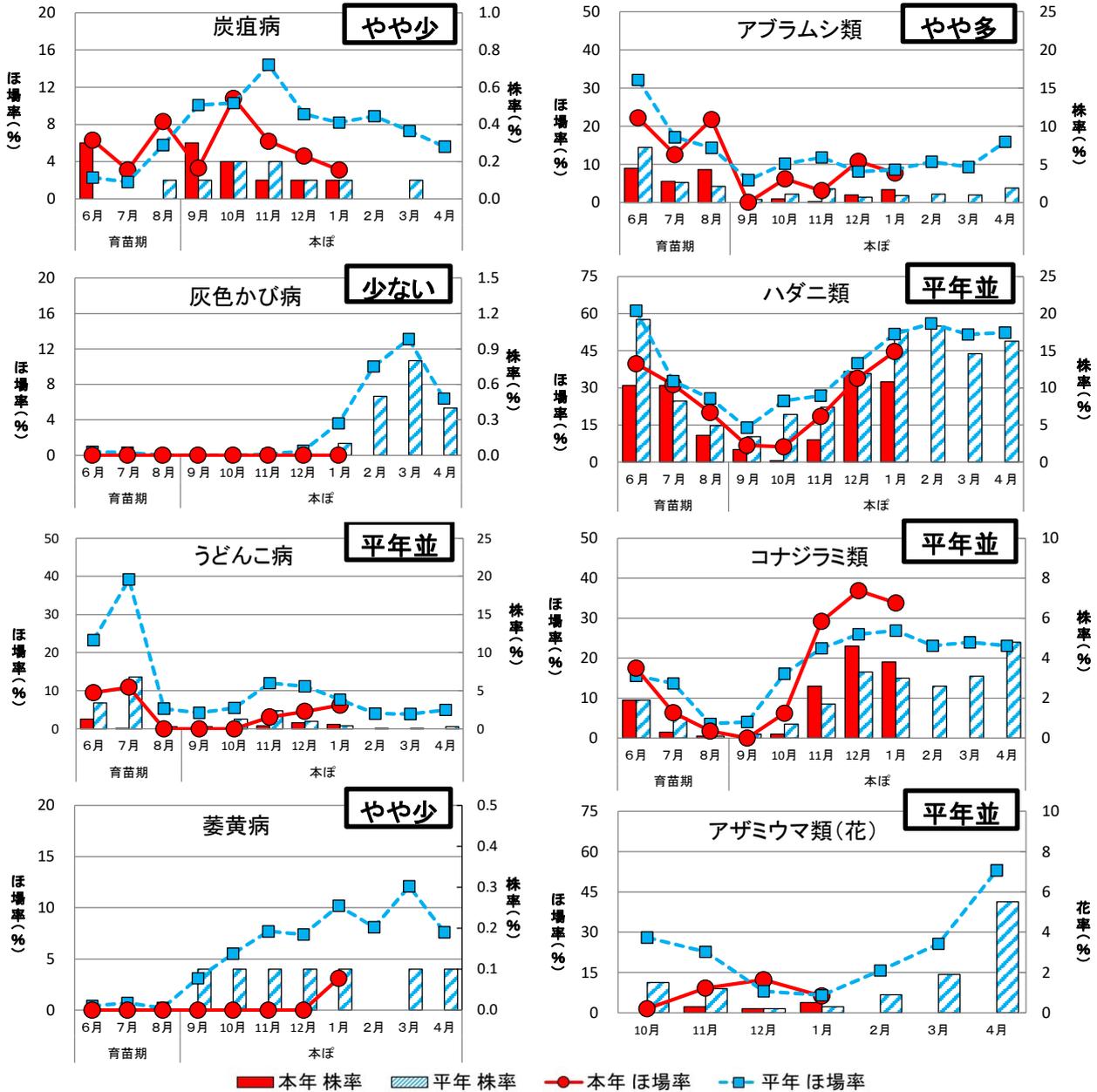
主要病害虫から珍しい種まで、定期的に更新中！

#栃木県#病害虫図鑑 検索&フォローよろしくお願ひします！

いちご病害虫情報第8号（1月）

令和5（2023）年1月20日
栃木県農業環境指導センター

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：65 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%) : 発生株数 / 調査ほ場数 × 25株 ※ほ場率(%) : 発生が確認されたほ場数 / 調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー ハダニ類の対策 ー

発生したら速やかに防除しましょう。天敵導入ほ場では、併せて追加放飼をしましょう。

1. ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
2. 天敵導入ほ場ではハダニ類の生息状況等をよく観察し、必要に応じて追加放飼を検討する。
3. 化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。厳寒期の気門封鎖剤全面散布は、天敵に対して影響があるので注意する。
4. 葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。

■ 今月のトピックス 灰色かび病

被害症状について

灰色かび病は、果実、ガク、果梗、葉、葉柄を侵し、灰色のカビが密生する。果実がもっとも侵されやすく幼果が侵されると、病斑は速やかに果実全体にひろがり、褐変あるいは黒褐変し、多湿のときには、軟化腐敗する。枯死した部位や、古葉、収穫後の果梗、果実にも発生する。曇天、降雨が続くと発生が広がりやすく、特に例年2～4月頃の発生が多くなるので注意する。

収穫後に、流通段階で発病、腐敗することがあるため選別に注意する。



果実の病斑



果実全体に密生する灰色のかび



花弁が残る果実の暗褐色初期病斑



葉柄の基部に発生した病斑

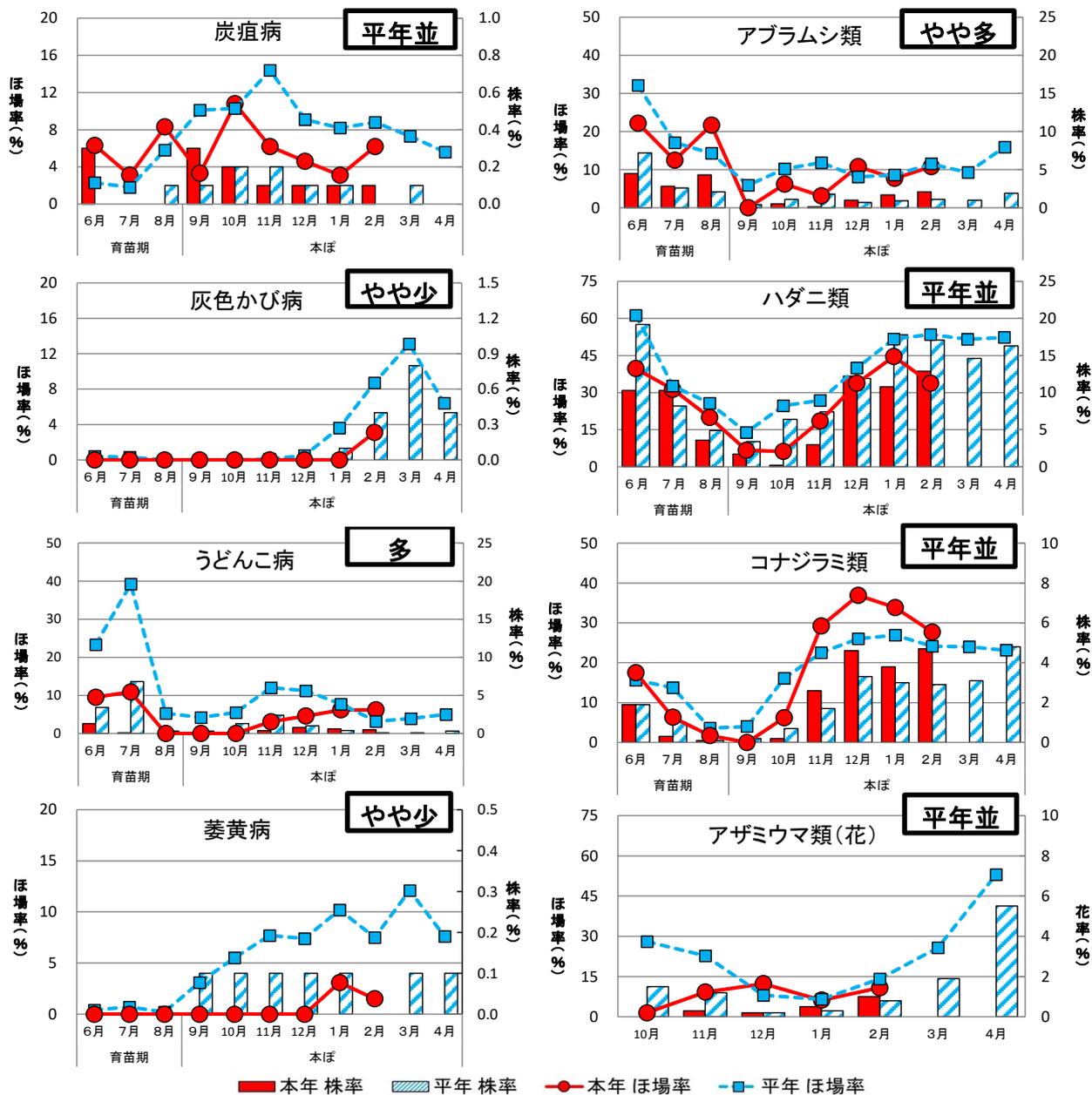
防除対策について

1. 多湿条件において発生しやすいので、下葉を除去し株元や果房の風通しをよくする。
2. 曇天時のかん水過多に注意し、保温状況を確認しつつ、換気時間を確保することで、ハウス内の湿度を下げる。
3. 発病した果実や果梗、枯死した部位は伝染源となるので、ほ場を良く観察し、見つけたら速やかに取り除き、施設外で処分する。
4. 発生初期に薬剤防除を行う。

いちご病害虫情報第9号（2月）

令和5（2023）年2月17日
栃木県農業環境指導センター

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：65 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

— 灰色かび病の対策 —

発生が多くなる時期です！まん延防止に努めましょう！

1. 多湿条件において発生しやすいので、下葉（老化葉等）を除去し株元や果房の風通しをよくする。
2. 曇天時のかん水過多に注意し、保温状況を確認しつつ、換気時間を確保することで、ハウス内の湿度を下げる。
3. 発病した果実や果梗、枯死した部位は伝染源となるので、ほ場を良く観察し、見つけたら速やかに取り除き、施設外で処分する。
4. 発生初期に薬剤防除を行う。

■ 今月のトピックス アザミウマ類

アザミウマ類は様々な作物に寄生する小さな虫で、いちご栽培においても重要な害虫となっています。県内いちご栽培ほ場における主要種はヒラズハナアザミウマ（図1、図3）で、一部ミカンキイロアザミウマ（図2）も見られます。ともに体長は1～2 mmで、両者とも非常に似た外見を持ち、現場での識別は困難です。



図1 ヒラズハナアザミウマ成虫



図2 ミカンキイロアザミウマ成虫



図3 ヒラズハナアザミウマ幼虫

これらのアザミウマ類はいちごの花に寄生し、成虫と幼虫が花床を中心に食害します。本虫が寄生した花をルーペでよく観察する、または白い紙等の上で花をやさしくはたき落とすと、紡錘状の小さな虫が確認できます（図1～4）。生きている場合、軽く息を吹きかけると動き出します。



図4 寄生花(赤円部がアザミウマ)

アザミウマ類の被害を受けると、果実表面がカスリ状に褐変し、商品価値がなくなります（図6）。

アザミウマ類は3月以降の気温上昇に伴いハウス内外での発生数が増加してきます。ほ場内を定期的に見回り、発生を認めたら防除を行いましょう。



図5 ミカンキイロアザミウマ被害花

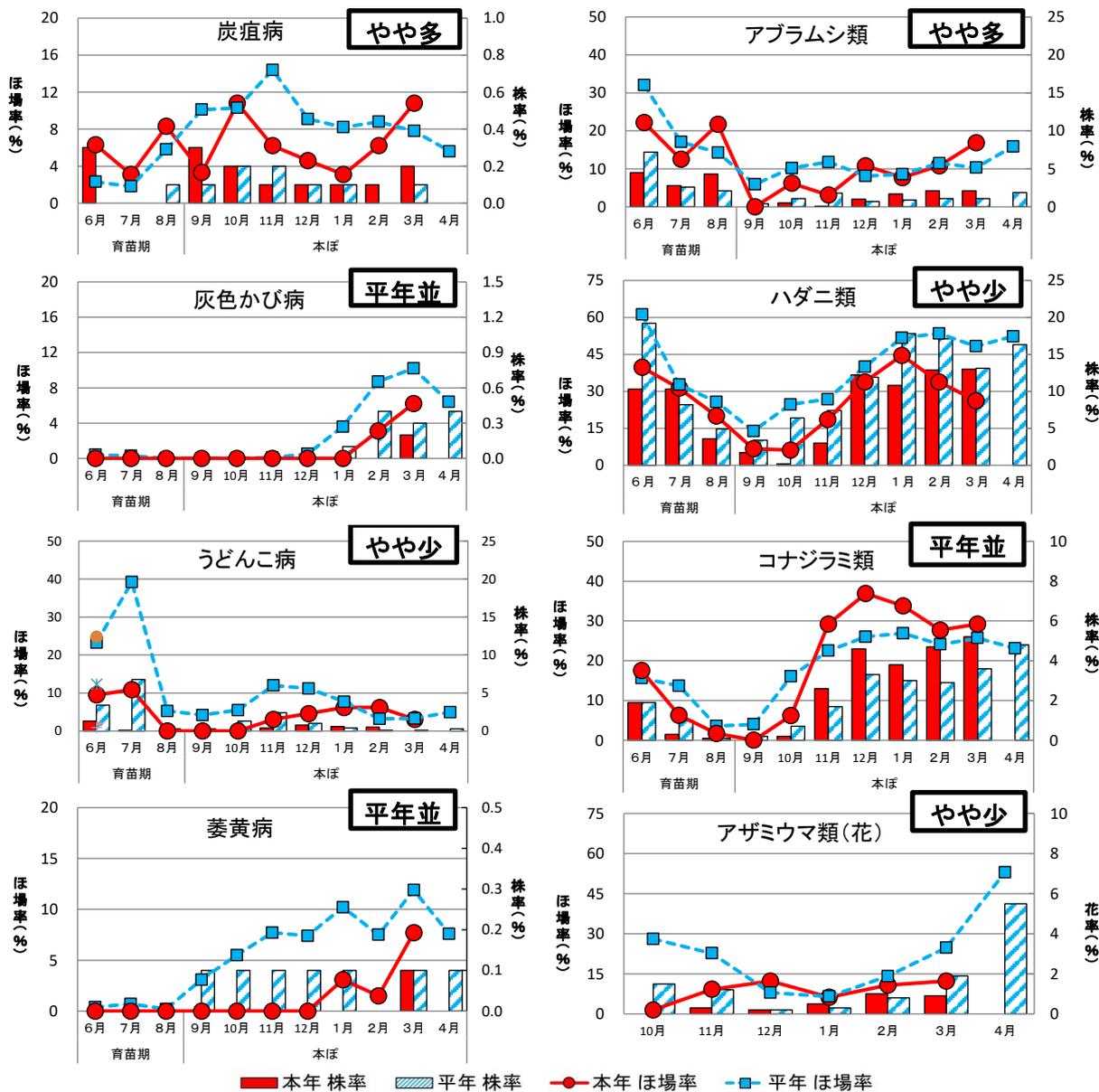


図6 被害果実

いちご病害虫情報第10号（3月）

令和5（2023）年3月17日
栃木県農業環境指導センター

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：65 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

－ アザミウマ類 －

気温の上昇で発生が多くなる時期です！発生を認めたら防除を行いましょう！

1. 低密度のうちにベネビア0D（I:28）等を散布する。観察した花の1割以上にアザミウマ類の寄生が見られる場合は、速やかにディアナSC（I:5、カブリダニ等の天敵に影響があるので注意する）等を散布する。
2. 施設の開口部への防虫ネットの展張又はハウス外への光反射シートの敷設により、侵入を抑制しましょう。青色粘着トラップを設置すると、侵入状況を早期に知ることができます。
3. 同じ薬剤であってもミカンキロアザミウマとヒラズハナアザミウマでは防除効果が異なります。また、薬剤感受性の低下を避けるため、必ずRACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

■ 今月のトピックス うどんこ病について

被害について

うどん粉をまぶしたような白色のカビによる病害です。【写真1～8】
長雨等の過湿や日照不足で軟弱徒長した株、過繁茂した株で多く発生しています。

うどんこ病が発病したつぼみでは、花弁がピンク色に変色する【写真5】ことがあります。

《葉での病徴》



写真1 葉表の病徴



写真2 葉裏



写真3 葉柄の病徴

《花・花柄・果実での病徴》



写真4
がくと果柄



写真5
花弁の変色



写真6 被害果(未熟)



写真7 被害果(成熟)

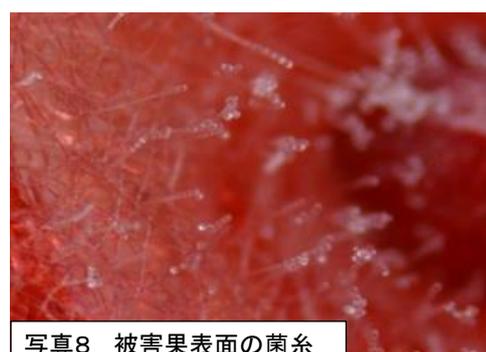
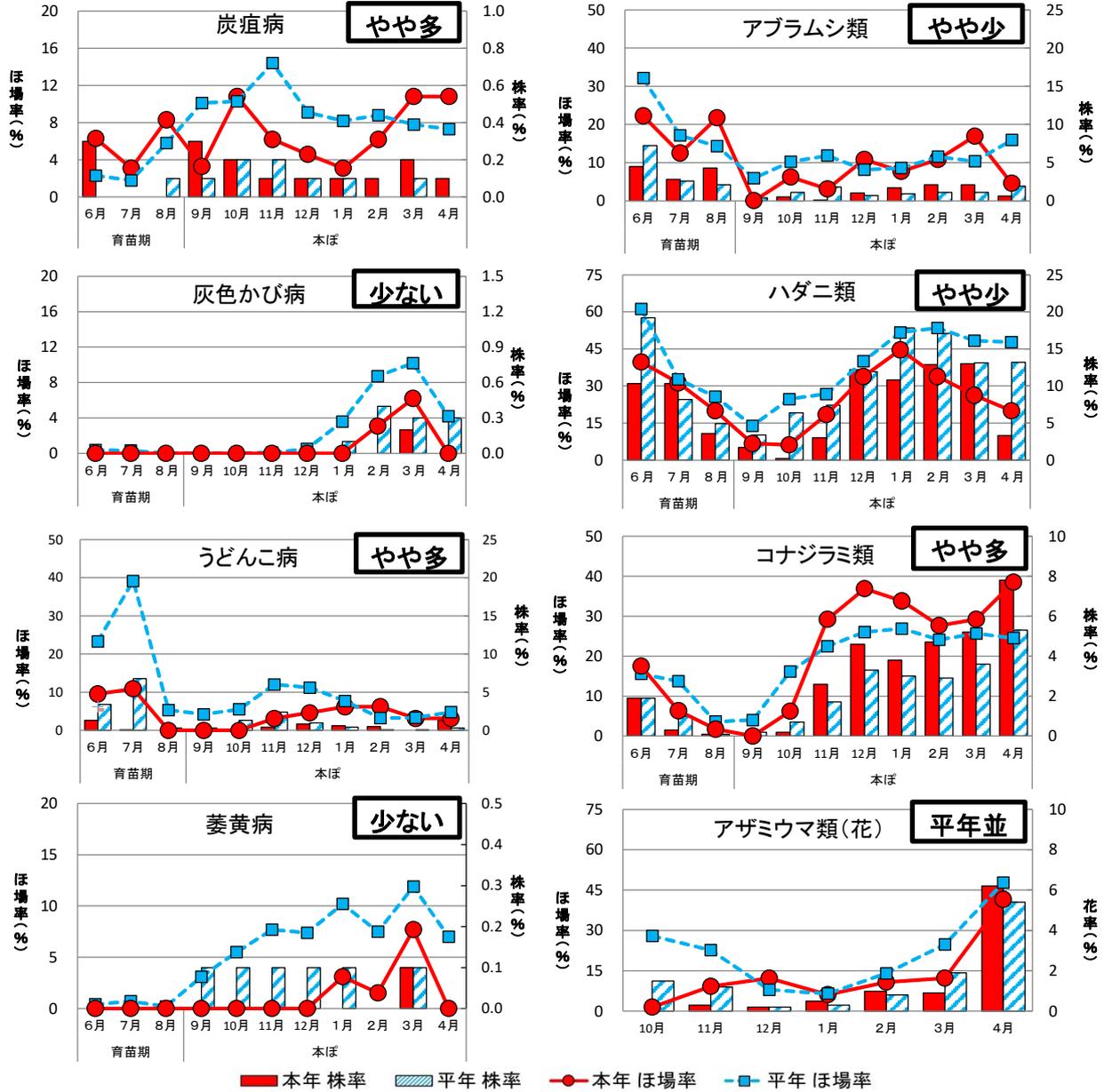


写真8 被害果表面の菌糸

防除対策について

- ・ 下葉（老化葉等）を除去し株元や花房の風通しをよくする。
- ・ 寒暖差による結露や、かん水過多にならないように注意する。
- ・ 気温上昇時は、施設内の換気を行う。
- ・ 薬剤防除は予防を主体に行う。薬剤には親和性向上のため展着剤を加え、葉裏まで薬液がよくかかるようにていねいに散布する。
- ・ 曇雨天時にはくん煙剤を使用する。硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるため、天敵導入ほ場では長時間のくん煙処理は避ける。

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：65 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

－ 育苗時の防除 －

下記の適切な育苗管理と定期的な薬剤防除を行いましょ。

かん水：過剰かん水を防ぐ。水のはねかえりのないかん水を行う。
(炭疽病、疫病、根腐病、菌核病対策)

通風：通風を良くする。(灰色かび病、菌核病対策)

侵入防止：防虫ネットの展張、除草を行う。
(アブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類対策)

罹病株の処分：抜き取りを行い、ほ場外で処分する。
(炭疽病、萎黄病対策)

「とちあいか」「とちおとめ」品種別病害虫発生調査結果について

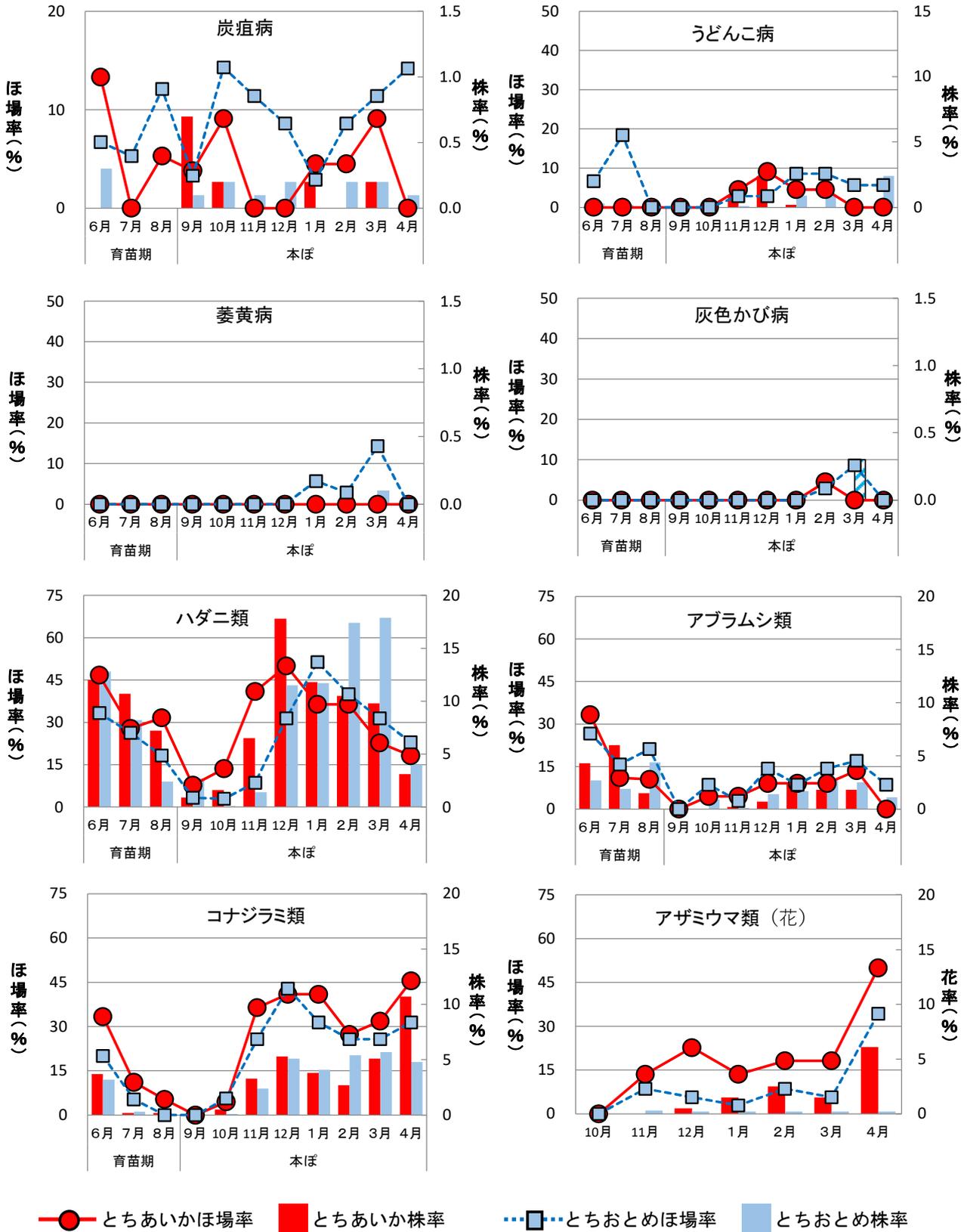
令和5年産のいちごの病害虫発生調査結果について、主要8病害虫の発生量の推移を品種別に集計しました。集計対象は「とちあいか」「とちおとめ」の2品種を栽培している耕作者の圃場としました。

萎黄病は、前年産と同様、強い特性を持つ「とちあいか」では発生が認められませんでした。他の病害虫は発生傾向が前年産と異なり、品種による発生の違いは明らかではありませんでした。

病害虫発生調査結果の品種別集計は今後も継続して行う予定です。

【調査期間：2022年6月～2023年4月 ほ場数：22～35ほ場（月ごとに変動）】

■ 主要8病害虫の品種別発生推移



いちご病害虫情報第12号(総集編)

＜令和5(2023)年産いちご主要病害虫の発生経過＞

育苗期は、やや高温で降水量が多く推移し、うどんこ病やハダニ類の発生が散見されましたが、炭疽病、萎黄病の発生は比較的少なく病害虫は全般にやや少ない発生でした。本ぼにおいても病害虫は、やや少ない～平常並の発生で推移しました。ハダニ類は天敵利用や定植前の高濃度炭酸ガス処理の普及により、ほ場被害が減少傾向にあります。

1 炭疽病

＜発生状況＞

全体的にやや少ない～平常並の発生で推移しましたが6月に一部ほ場で散見されました。年明け以降は、発病株の処分漏れや潜在感染株の発症により、ほ場率がやや高くなりました。

＜防除対策＞

伝染を予防するため、水の跳ね返りのない方法でかん水を行いましょう。発生前から予防的な薬剤散布を行うとともに、発病株はほ場内外に放置せず、ポリ袋などで密封し処分しましょう。

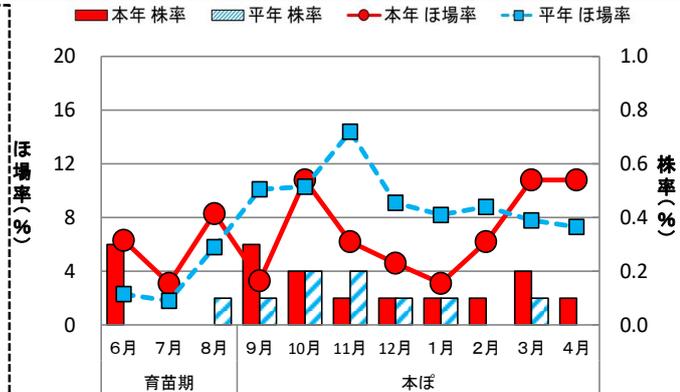


図1 炭疽病の発生ほ場率・株率

2 萎黄病

＜発生状況＞

全体的に平常より少ない発生でしたが、3月には一部ほ場で発生が見られました。

＜防除対策＞

病原菌は土壤中で4～5年以上生存するため、本ぼで発生が見られたほ場では土壤消毒を適切に行いましょう。

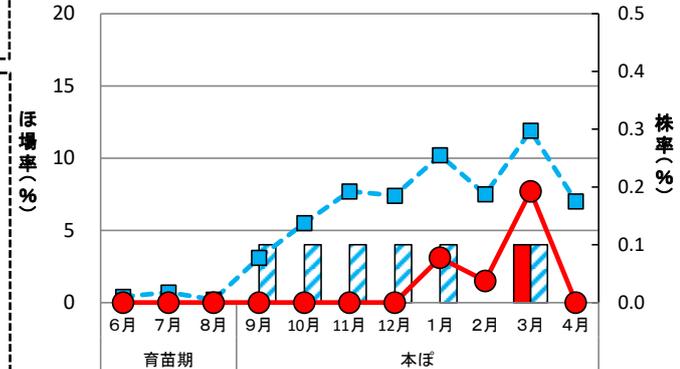


図2 萎黄病の発生ほ場率・株率

3 灰色かび病

＜発生状況＞

全体的に、少ない～平常並の発生でした。

＜防除対策＞

多湿条件において発生しやすいので、ハウス内が多湿にならないよう、かん水量や換気に注意するとともに、薬剤を丁寧に散布しましょう。

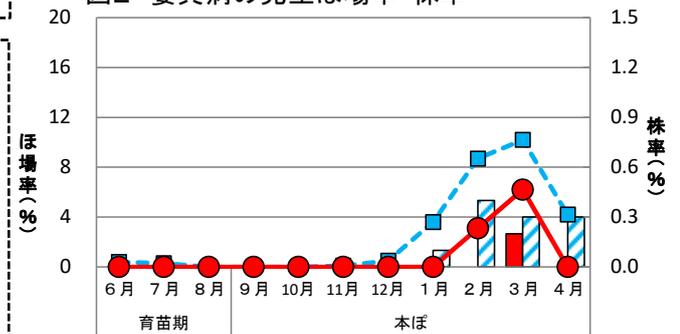


図3 灰色かび病の発生ほ場率・株率

4 うどんこ病

＜発生状況＞

年内はやや少ない発生で推移しましたが、年明け以降は一部ほ場において平常よりやや多い発生となりました。

＜防除対策＞

育苗期の防除を徹底し、本ぼに病原菌を持ち込まないようにしましょう。

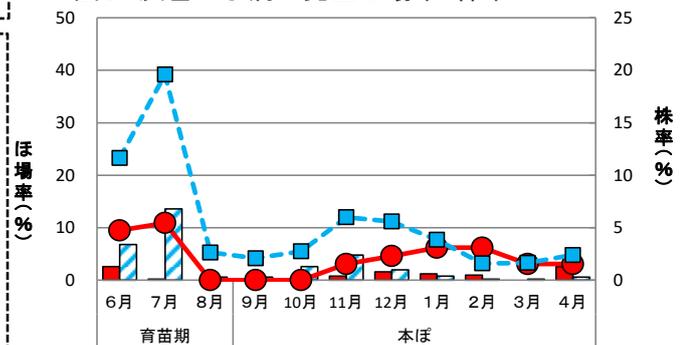


図4 うどんこ病の発生ほ場率・株率

5 ハダニ類

＜発生状況＞

育苗期から本ぼの栽培期間を通して発生が見られましたが、全体的にやや少ない～平年並の発生でした。

＜防除対策＞

早期発見・早期防除に努め、天敵製剤（カブリダニ類）を使用する場合は、ハダニ類の発生前に放飼しましょう。

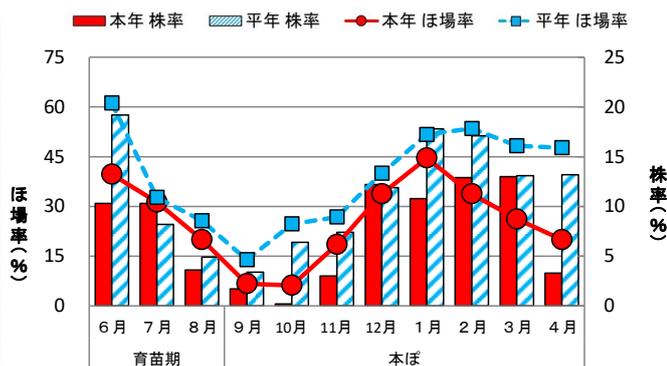


図5 ハダニ類の発生ほ場率・株率

6 ハスモンヨトウ

＜発生状況＞

本ぼでは9月から12月に一部ほ場で発生が見られましたが、全体的に少ない～平年並の発生でした。

＜防除対策＞

幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、早期発見・早期防除に努めましょう。また、若齢幼虫が集団でいるうちに葉ごと摘み取り、処分しましょう。

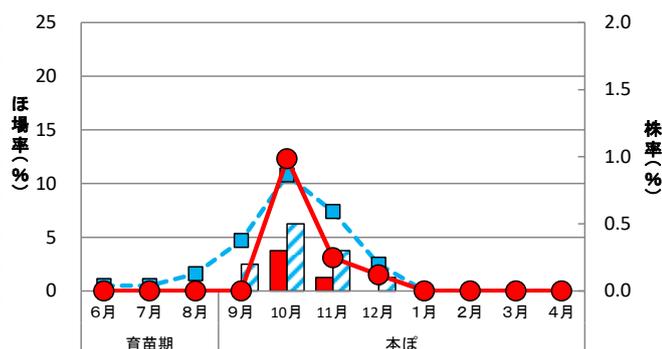


図6 ハスモンヨトウの発生ほ場率・株率

7 アブラムシ類

＜発生状況＞

育苗期から本ぼの栽培期間を通して発生が見られました。3月は平年よりやや多い発生でしたが、全体的にやや少ない～平年並の発生でした。

＜防除対策＞

早期発見・早期防除に努めるとともに、葉裏にも薬剤がよくかかるよう丁寧な薬剤散布を心がけましょう。

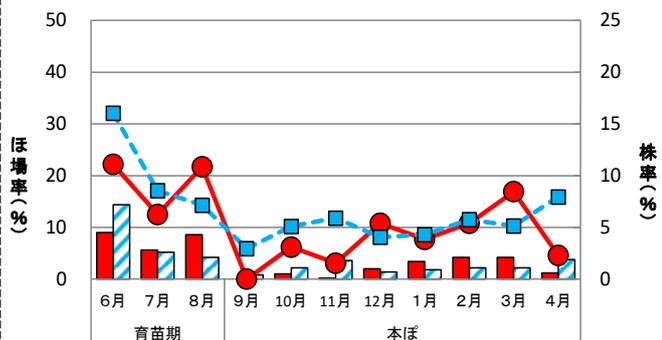


図7 アブラムシ類の発生ほ場率・株率

8 アザミウマ類

＜発生状況＞

11月から発生が見られ、全体的にやや少ない～平年並の発生でした。

＜防除対策＞

開花初期にハウス外から侵入したアザミウマが多いと春先の発生につながることから、秋の防除を徹底しましょう。春期の飛び込みがあるので、適切に防除しましょう。

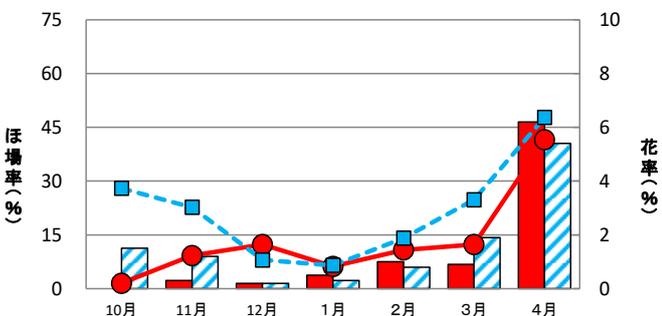


図8 アザミウマ類の発生ほ場率・花率

育苗期間中に病害虫防除を徹底し、本ぼへの持込みを防止しましょう。

■ 今月の防除ポイント

親株と本ぽを出入りする時期です。本ぽの病害虫を親株に持ち込まないよう作業順番に注意しましょう。親株に病害虫の発生が認められたら速やかに防除し、育苗期の発生や次作の本ぽへの持込みを防止しましょう。

－ 炭疽病 －

親株での発生は、被害が大きくなるため、防除対策を徹底しましょう。

1. 主に、6月下旬から9月下旬にかけて発病しますが、高温の時期に特に発生しやすくなります。
2. 頭上かん水は控え、できるだけ水の跳ね返りがないような株元かん水等を行いましょう。
3. 発病株は見つけしだい取り除き、肥料袋等に詰め、空気を排出し口をしっかりと閉じて、日当たりのよい野外に放置し、嫌氣的発酵処理を十分に行った後に処分しましょう。
4. 症状が出てからの防除は困難なので、発生前から定期的に予防散布を行いましょう。

－ ハダニ類 －

気温の上昇で発生が多くなる時期です！発生を認めたら防除を行いましょう！

1. 本ぽで薬剤抵抗性を発達させたハダニ類を親株に持ち込まないために、本ぽ作業後に親株の管理作業を行わないようにしましょう。
2. 育苗期の薬剤散布にあたっては、収穫前使用日数の長いトクチオン乳剤（I:11B 収穫75日前まで）やアグリメック（I:6 親株育成期、育苗期）等を散布しましょう。
3. 雑草はハダニ類の発生源になるので、ほ場内外の除草を徹底しましょう。
4. 気門封鎖剤や天敵製剤を活用することで、作全体の化学農薬の散布回数を減らし薬剤感受性の低下を防ぎましょう。また、気門封鎖剤は5日程度の間隔をおき、複数回散布しましょう。

－ アブラムシ類 －

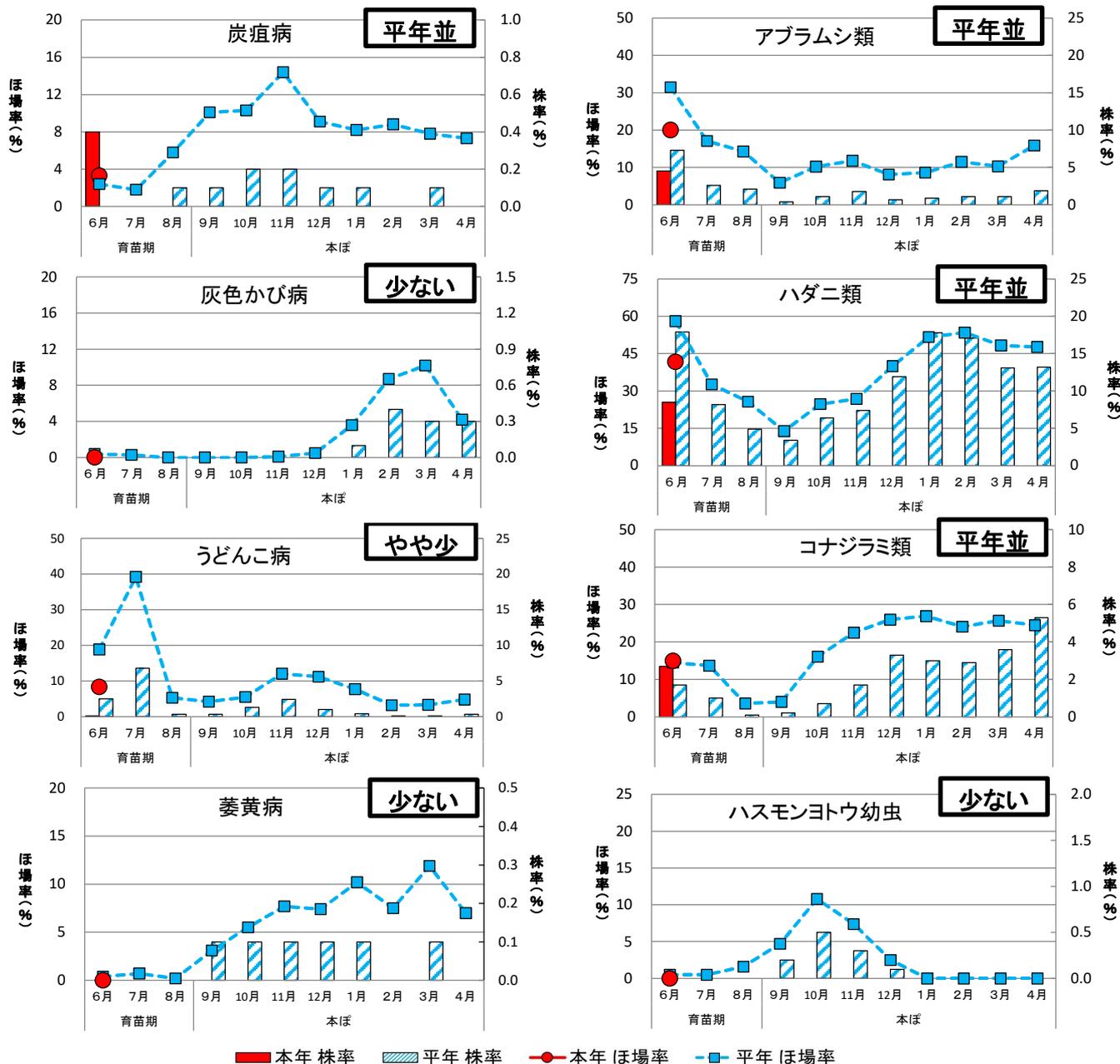
気温が高く、飛び込みが多くなる時期です！発生を認めたら防除を行いましょう！

1. 雑草はアブラムシ類の発生源になるので、ほ場内外の除草を徹底しましょう。
2. 施設栽培では開口部に防虫ネットを張り、アブラムシ類の侵入を防ぎましょう。
3. 発生初期から薬剤を散布しましょう。薬剤感受性の低下を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

いちご病害虫情報第1号（6月）

令和5（2023）年6月23日
栃木県農業環境指導センター

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：60か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

－ 炭疽病の対策 －

高温・多湿条件で発生が多くなります。予防を主体とした防除対策を徹底しましょう！

- 1 症状が出てからの防除は困難なので、発生前から、ベルコートフロアブル(RACコードF:M7)等を定期的に予防散布する。
- 2 分生子の飛散・伝染を防ぐため、頭上かん水は控え、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水の跳ね返りのない方法でかん水を行う。
- 3 罹病株は早急に取り除いて施設外へ持ち出し、嫌氣的発酵処理(抜き取った株を肥料袋等に詰め、空気を排出し口をしっかりと閉じて、日当たりのよい野外に放置する)後に処分する。

■ 今月のトピックス うどんこ病

症状について

うどん粉をまぶしたような白色のカビによる病害です(写真1~8)。長雨等の過湿や日照不足で軟弱徒長した株、過繁茂した株で多く発生します。うどんこ病が発病したつぼみでは、花弁がピンク色に変色することがあります(写真5)。

防除対策について

- 1 薬剤防除は予防を主体に行う。薬剤には展着剤を加え、葉裏にも薬液が良くかかるようにていねいに散布する(育苗期・本ぽ)。
- 2 育苗時からの防除を徹底し、本ぽに菌を持ち込まないようにする(育苗期)。
- 3 葉(老化葉等)を除去し株元や花房の風通しを良くする(本ぽ)。
- 4 寒暖差による結露や、かん水過多にならないように注意する(本ぽ)。
- 5 気温上昇時は、施設内の換気を行う(本ぽ)。
- 6 曇雨天時にはくん煙剤を使用する。硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるため、天敵導入ほ場では長時間のくん煙処理は避ける(本ぽ)。

《葉での病徴》



写真1 葉



写真2 葉裏



写真3 葉柄

《花・花柄・果実での病徴》



写真4
がくと果柄



写真5
花弁の変色



写真6 被害果(未熟)



写真7 被害果(成熟)

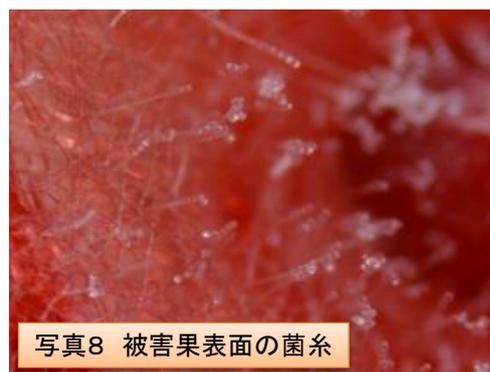
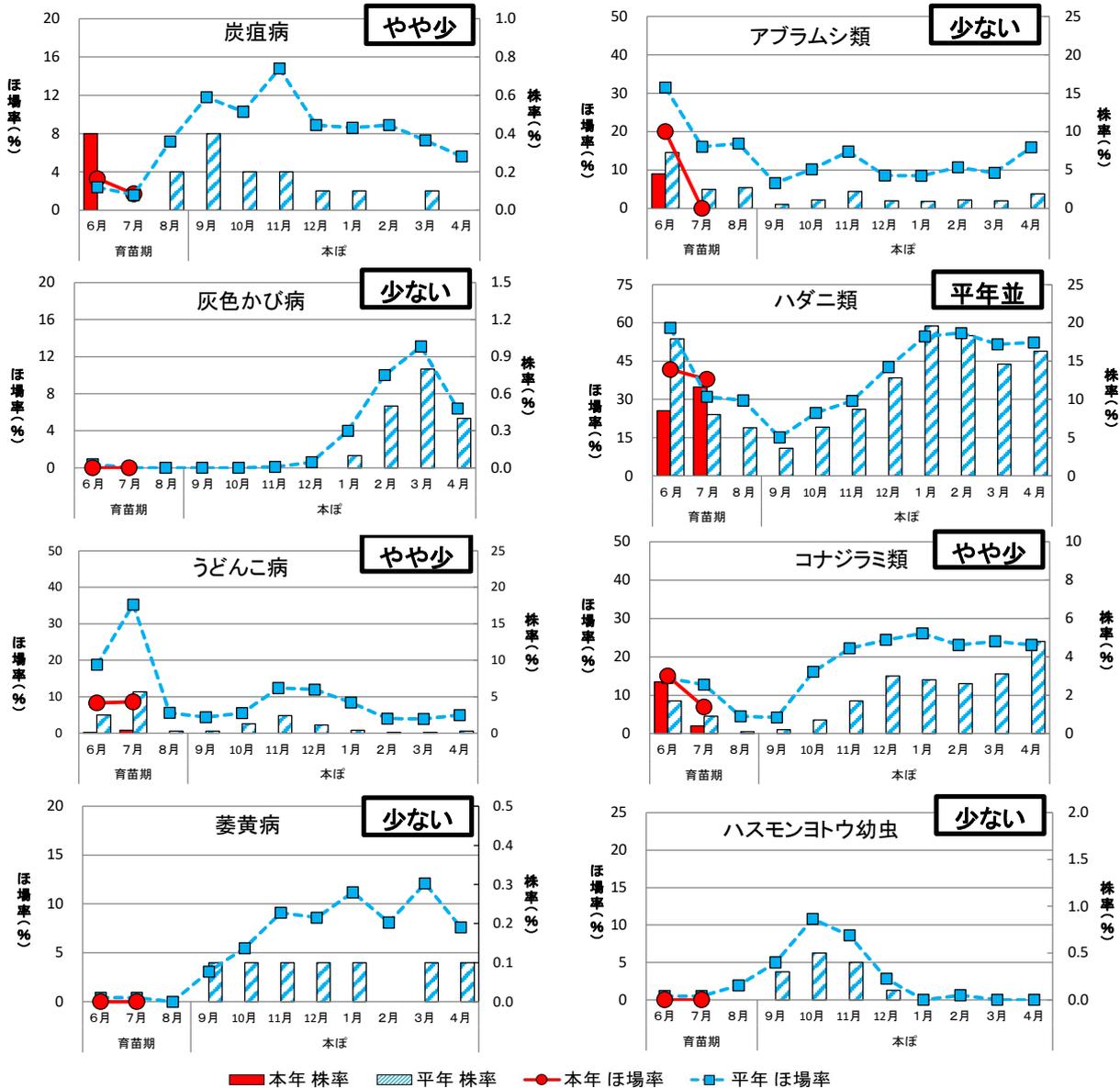


写真8 被害果表面の菌糸

いちご病害虫情報第2号（7月）

令和5(2023)年7月21日
栃木県農業環境指導センター

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：58 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

一 育苗期のハダニ類防除 一

ハダニ類は平均並の発生量となっています。親株、子苗ともハダニ類の発生が見られ、多いところではほとんどの株に発生しています。ハダニ類の本ほへの持ち込みを防ぐため、育苗時の防除を徹底しましょう。

- 1 育苗期の薬剤散布には、天敵や使用時期を考慮してトクチオン乳剤（RACコード I:1B、収穫75日前まで）やアグリメック（I:6、親株育成期、育苗期）等を使用しましょう。また、モベントフロアブル（I:23）を育苗期後半～定植当日に灌注しましょう。
- 2 定植後に天敵導入する際は、天敵に影響の少ない薬剤を計画的に散布しましょう。
- 3 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 4 定植苗の高濃度炭酸ガス処理を適切に行い、本ほへのハダニ類の持ち込みを抑えましょう。

■ 今月のトピックス 炭疽病

被害について

炭疽病はいちごの重要病害のひとつで、育苗期間中の発生が多い病害です。

本病の病原は糸状菌です。葉上の黒色小斑点（図1）や、急速な株の萎凋（図2）などの症状を引き起こします。萎凋株のクラウンを割断すると、内部が外側から褐変しているのが特徴です（図3）。葉柄やランナー上の黒色陥没病斑（図4）には、多湿時には鮭肉色の孢子塊が形成されます。

防除対策について

本病は、発病株や罹病残渣上に形成された胞子が、降雨やかん水等の水はねによって周囲の株に飛散して伝染します。本病の発生を防ぐため、以下のことに注意して栽培しましょう。

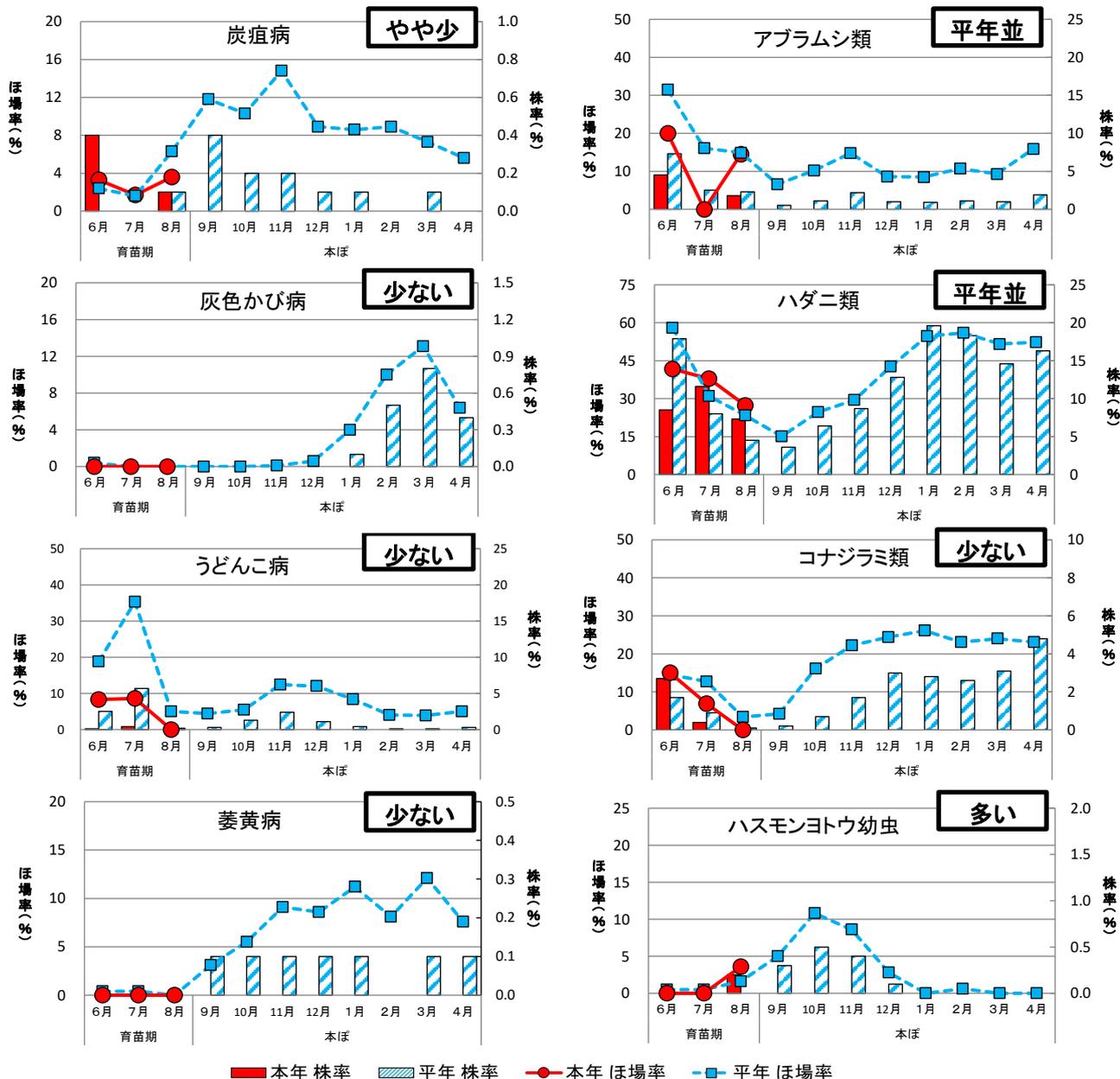
- 1 育苗時は点滴かん水を行い、頭上かん水を避ける（水の跳ね上げ防止）。
- 2 発病が確認された株は速やかに取り除き、施設外に持ち出し適切に処分する。
- 3 発病株の周辺の株は定植苗として使用しない（潜在感染のおそれ）。
- 4 予防を目的とした薬剤散布を行う（夕立、台風の後には発生が多いため重点的に）。
- 5 RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する（耐性菌発生防止）。



いちご病害虫情報第3号（8月）

令和5（2023）年8月25日
栃木県農業環境指導センター

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：55か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

— 育苗期の病害虫防除 —

炭疽病の発生ほ場が散見されています。

感染株を本ほに持ち込まないことが最も重要な防除対策です！

【炭疽病の防除対策】

- 1 発病が確認された株を速やかに取り除き、施設外で適切に処分する。
- 2 長雨や台風等の前後に重点的に予防散布を行う。
- 3 耐性菌発生防止のため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- 4 発病株の周辺株は本病の症状が見られない場合でも感染（潜在感染）していることがあるので、定植苗として使用しない。

■ 今月のトピックス 萎黄病

被害症状について

萎黄病に感染すると、葉の奇形（写真1）、株の萎縮や黄化（写真2）、クラウン内部の導管の褐変（写真3）、根部の褐変（写真4）等の症状が現れる。高温期に感染及び発病しやすいが、盛夏期には症状が不明瞭になることがある。

土中に残った孢子が感染源となり、根から侵入して感染、発病する。また、感染親株からランナーを通じて子苗にも感染する（写真5）。

土壤温度が25℃～30℃になると多発しやすくなるため、高温期の発生が目立つことが多く、乾燥などで根が傷みやすい環境下で発生が助長される。病原菌は自然土壤中で4～5年以上以上生存できるため、土壤が汚染されている場合、土壤消毒等を行わないと次作も発生する。

防除対策について

発病してからの防除は困難なので、予防を主体に防除対策を実施する。

- 1 定植前に苗をよく選別し、発病株を本ぽに持ち込まないようにする。
- 2 発病が確認された株は速やかに取り除き、施設外でポリ袋等に密閉し処分する。
- 3 一度本病が発生したほ場では、定植前に土壤消毒を行う。



写真1
小葉の奇形



写真2
株の萎縮、黄化



写真3 クラウン断面



写真4 根の褐変

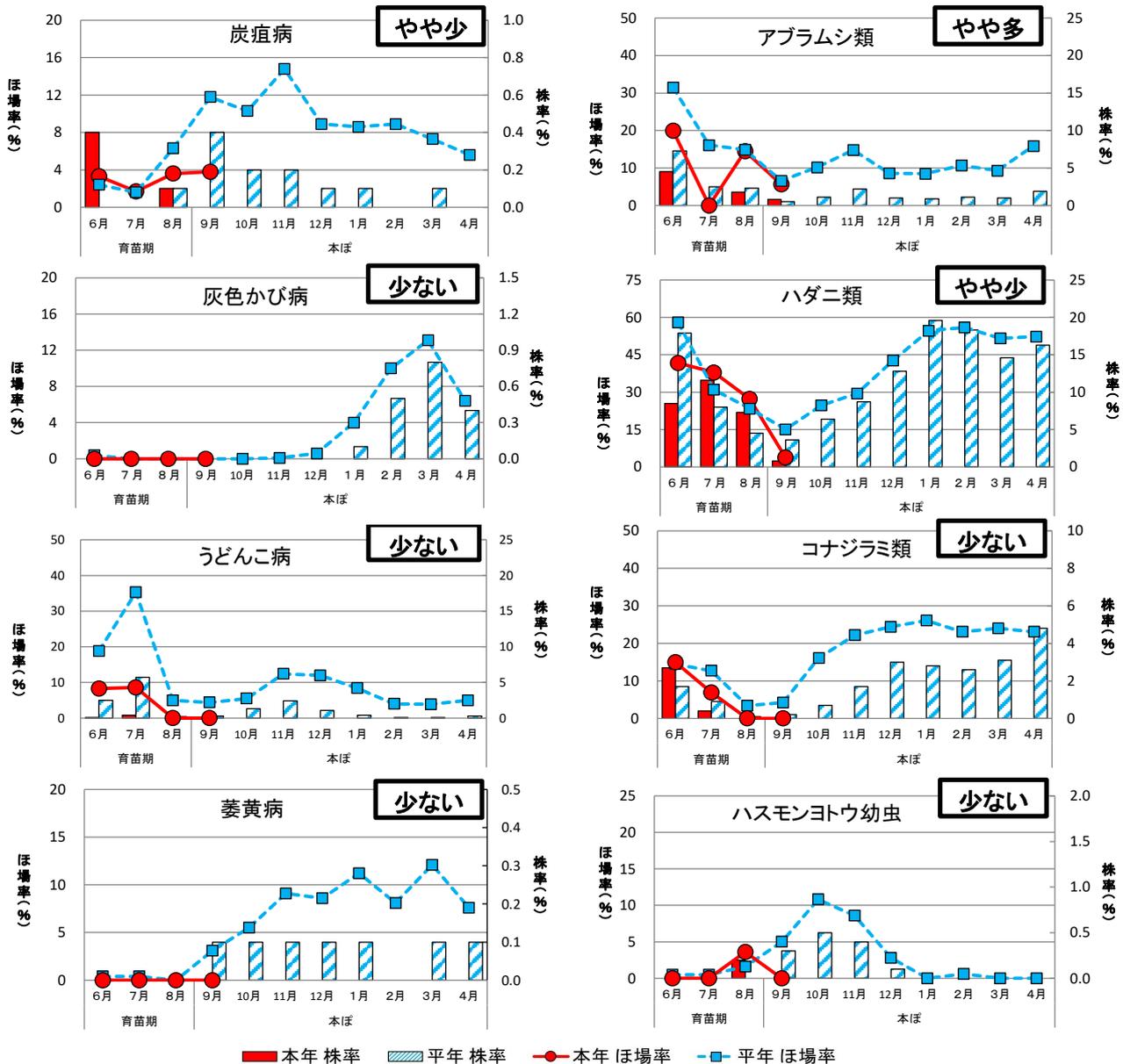


写真5 ランナーの症状

いちご病害虫情報第4号（9月）

令和5（2023）年9月22日
栃木県農業環境指導センター

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：53 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー 本ぽ定植後の炭疽病対策 ー

本県において9～11月は、炭疽病の発生ほ場率・株率が高い時期です。今年は育苗期以降、発生しやすい気温の高い状態が続いているため、例年以上に発生に注意しましょう。炭疽病の発生を認めたら、速やかに抜き取り、適切に処分しましょう

【炭疽病】

- 炭疽病は比較的高温を好み、20℃以上で発病する。
- 本ぽ定植後、ハウス内温度が高まると発病適温となり、潜在感染株が突然萎凋・枯死する。
- 発病株は速やかに抜き取り、ハウス外へ持ち出し適切に処分する。
- いちごの登録農薬は育苗床と本ぽで使用できる種類が異なることが多いため、ラベルをよく読み正しく使用する。

■ 今月のトピックス ハスモンヨトウ

生態と被害

卵塊（写真1）は毛に覆われた状態で葉裏に産み付けられる。

幼虫は、若齢（写真3）のうちには集団で葉を食害し不整形でカスリ状の食痕をつくる（写真2）。中・老齢（写真4・5）になると周囲の株へと分散し旺盛に食害し、昼間は地際や日陰に隠れるようになる。

幼虫は、頭の後ろに1対の大きな黒い斑紋のあるのが特徴である。

防除対策について

- 1 ほ場周辺の雑草は発生源となるため、雑草管理を徹底する。
- 2 ほ場内の観察により早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
- 3 成虫の侵入を阻止するため、施設の開口部や出入り口に防虫ネット（目合4～5mm）を展張する。施設のパイプ等にも産卵することもあるので注意する。
- 4 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。



写真1 葉上の卵塊



写真2 寄生葉

写真3 若齢幼虫



写真4 中齢幼虫

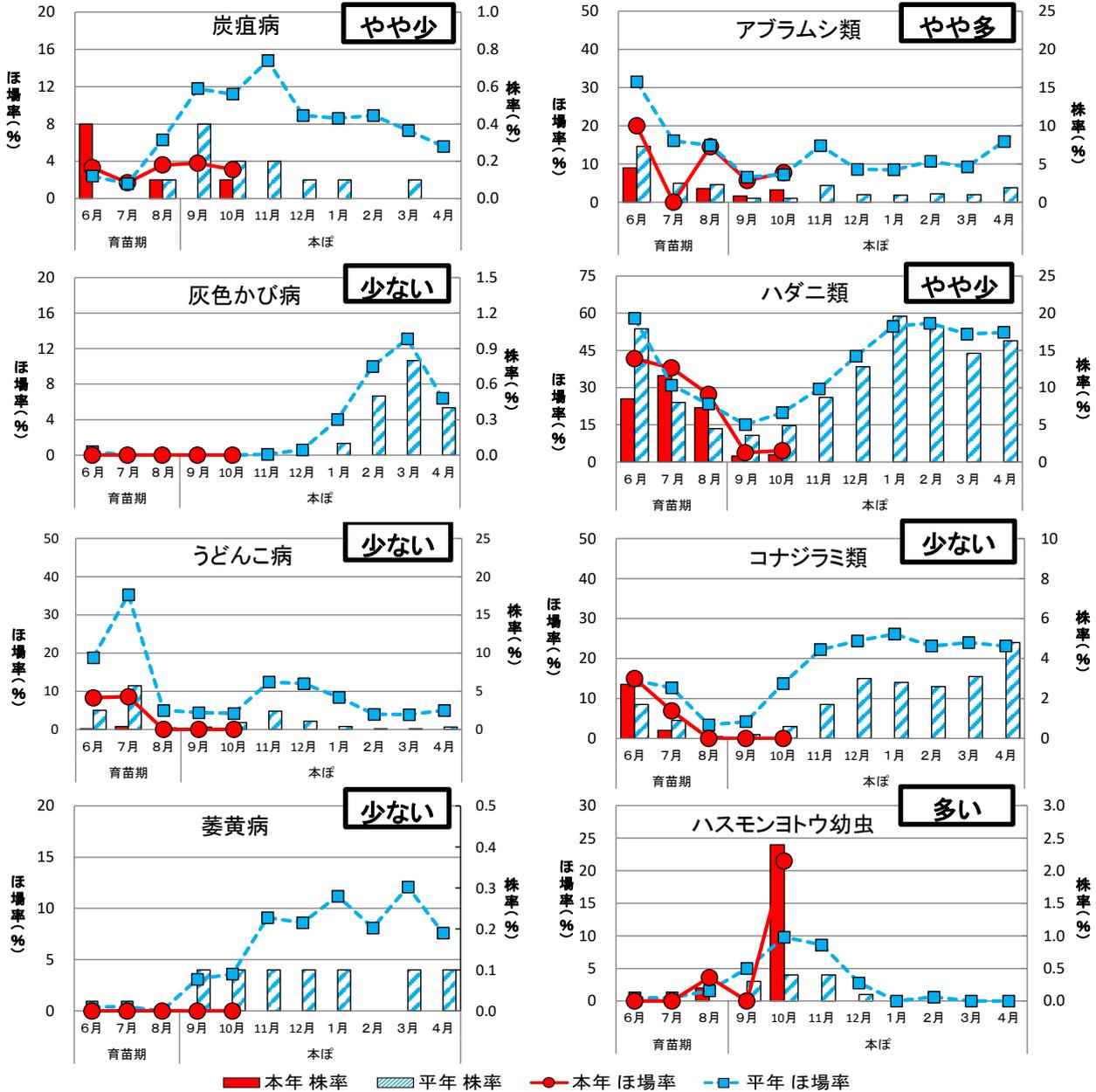


写真5 老齢幼虫



終齢幼虫では、体長4cm程度

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：65 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー ハスモンヨトウの対策 ー

10月の調査では、ハスモンヨトウの発生が多く確認されました。よくほ場を観察し、発生初期の段階で防除を行いましょう。

- 1 定期的にはほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。施設のパイプ、ネット等の資材にも産卵することもあるので注意して観察する。
- 2 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。
- 3 ほ場周辺の雑草は発生源になるため、雑草管理を徹底する。

■ 今月のトピックス アザミウマ類

いちごに寄生するアザミウマ類

アザミウマ類は様々な作物に寄生する小さな昆虫で、いちご栽培においても重要な害虫となっています。県内いちご栽培ほ場における主要種はヒラズハナアザミウマ（写真1）で、ハナアザミウマ（写真2）やミカンキイロアザミウマ（写真3）も見られます。体長はいずれの種も1～2mmで、現場での種の識別は困難です。

アザミウマ類の発生を確認するには、ルーペでの観察の他、白い紙等の上で花を軽く叩く方法があります。アザミウマ類が発生していれば、花を叩くと紡錘形で褐色または淡黄色の小さな虫が紙の上に落ち、観察することができます。



写真1 ヒラズハナアザミウマ成虫



写真2 ハナアザミウマ成虫



写真3 ミカンキイロアザミウマ成虫

アザミウマ類の被害

アザミウマ類は主にいちごの花に寄生し、花床を食害します（写真4）。成虫、幼虫が多数寄生すると、食害を受けた花は黒褐色に変色し、不稔になります（写真5）。果実が肥大した場合でも、幼虫が果皮を食害し、そう果（種に見える部分）の周囲を残して表面が褐変し、商品価値が低下します（写真6）。



写真4 寄生花
（赤円がアザミウマ成虫）



写真5 花の被害



写真6 果実の被害

アザミウマ類の防除

野外のアザミウマ類は10月頃まで活発に動き回ります。そのため、10月中旬までに開花が進んでいるほ場では、アザミウマ類の飛び込みが多くなる傾向にあります。本年度は高温期が続いたため、平年より雑草が多く繁茂し、アザミウマ類の飛び込みが増えるおそれがあります。施設周辺の除草を徹底しましょう。

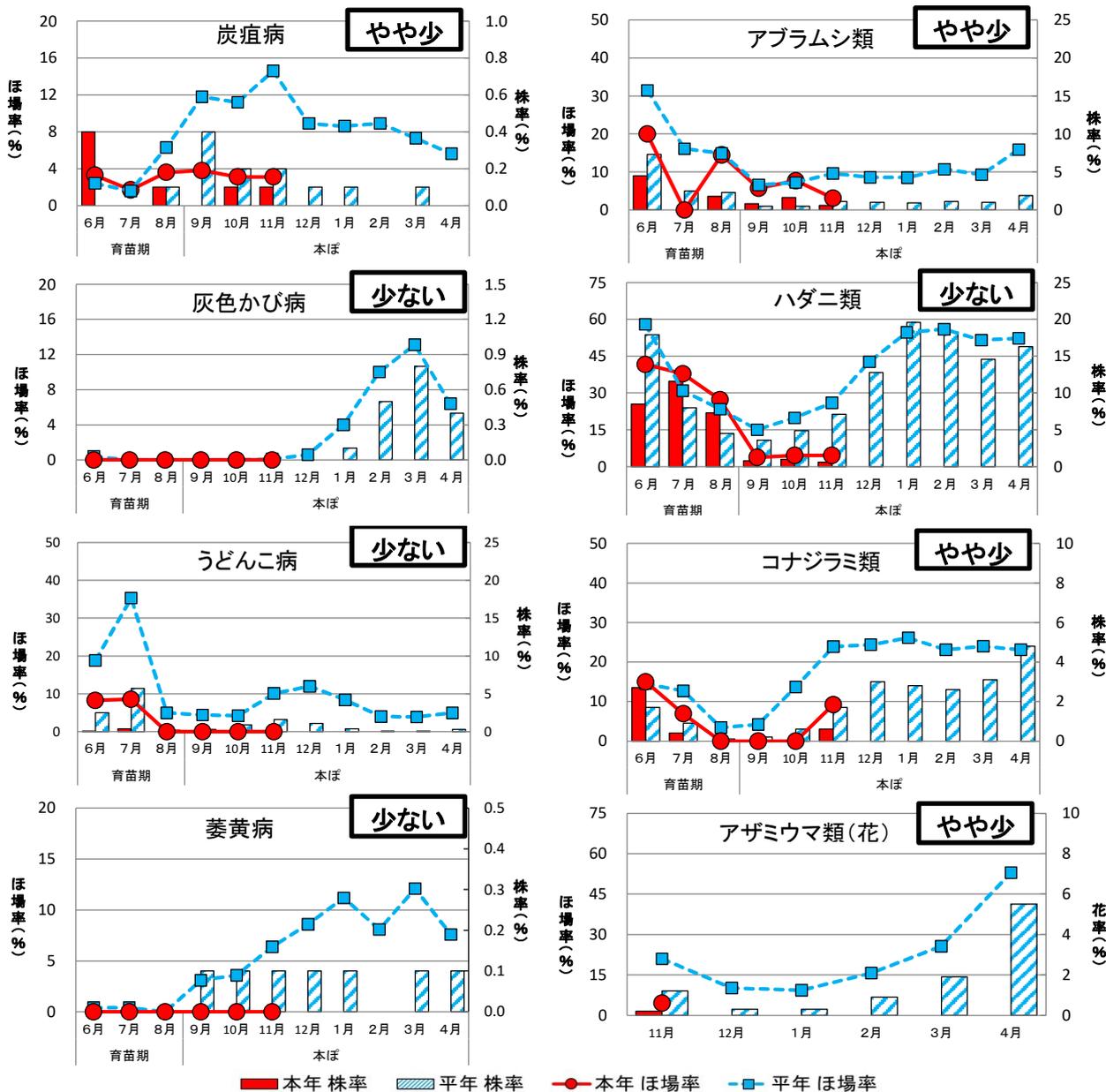
施設内で観察した花の1割以上にアザミウマ類が発見された場合、速やかな防除が必要です。よくほ場を見回り、発生初期のうちに防除しましょう。

秋に被害が発生したハウスでは、2月頃からの被害発生に注意しましょう。

いちご病害虫情報第6号 (11月)

令和5(2023)年11月17日
栃木県農業環境指導センター

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：65か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%) : 発生株数 / 調査ほ場数 × 25株 ※ほ場率(%) : 発生が確認されたほ場数 / 調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー ハダニ類の対策 ー

収穫が本格化する前に防除を徹底して行い、被害の拡大を防ぎましょう。

- 1 ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
- 2 化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- 3 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいため、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。

■ 今月のトピックス コナジラミ類

被害について

コナジラミ類は成虫の体長が1～2mm程の白い小さな虫で、いちごではオンシツコナジラミが主要種ですが、タバココナジラミが発生することもあります。

コナジラミ類による主な被害は、吸汁加害による株の生育不良です。他の野菜類では、ウイルス病を媒介して間接的に被害を与えることもありますが、いちごでは今のところウイルス伝搬の報告はありません。

防除対策について

多発生してからでは防除が困難なため、初期防除を徹底しましょう。

- 1 施設内外の除草を徹底する。いちご以外の野菜、花き類はハウス内に持ち込まない。
- 2 幼虫は葉裏に寄生するため、薬剤散布は葉裏にもよくかかるように行う。
- 3 ラノーテープを各畝の上に設置し、増殖を長期間抑制する。
- 4 化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- 5 栽培終了時にはハウスの蒸し込みを行い、病害虫を外に出さないようにする。



写真1 オンシツコナジラミ成虫
(翅の隙間が閉じて見える)



写真2 オンシツコナジラミ蛹
(白色で厚みのある小判型)



写真3 タバココナジラミ成虫
(翅の隙間が空いて見える)

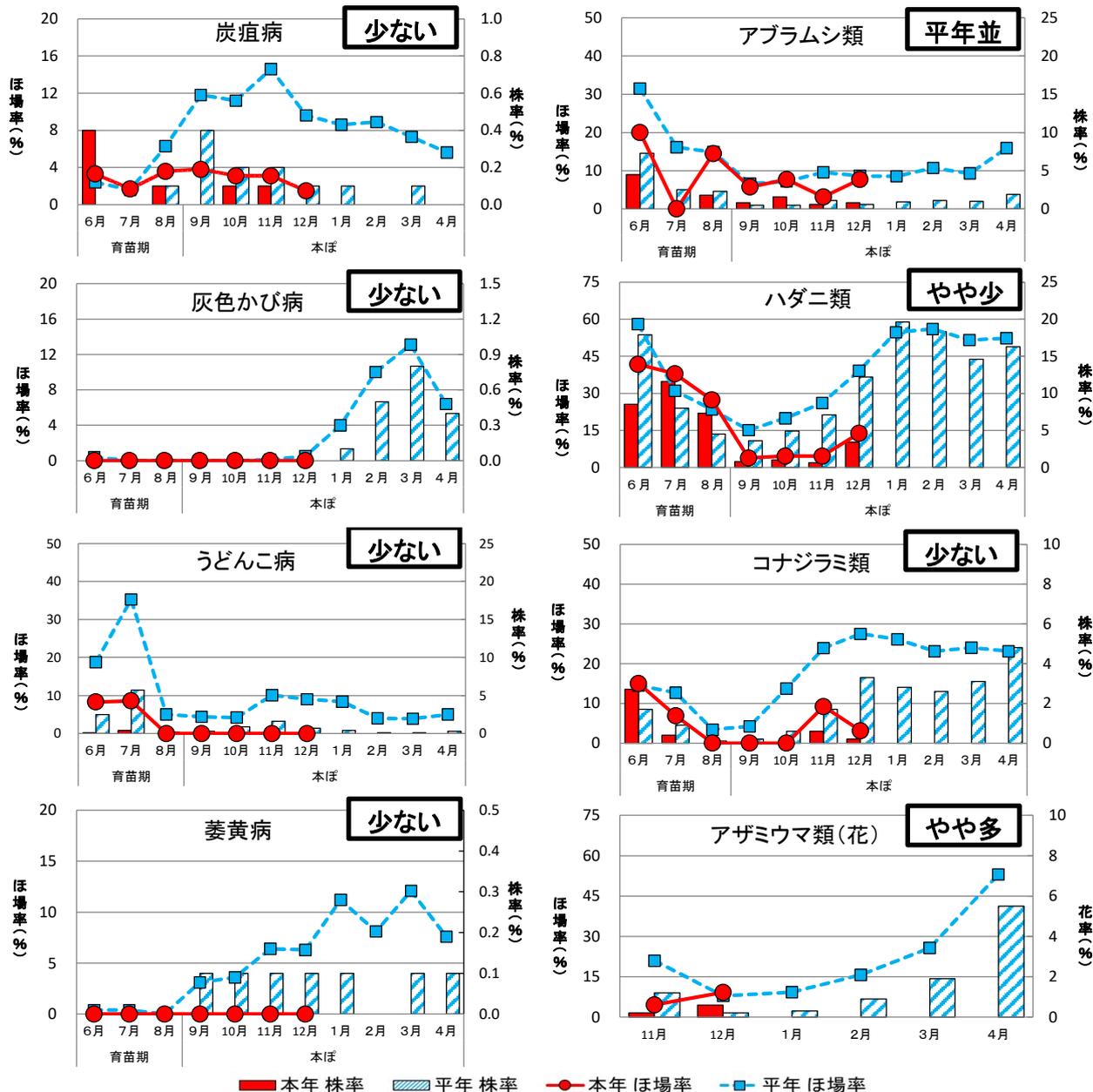


写真4 タバココナジラミ蛹
(黄色で厚みがなく扁平)

いちご病害虫情報第7号（12月）

令和5（2023）年12月22日
栃木県農業環境指導センター

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：65か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー 灰色かび病の対策 ー

予防を主体に防除を行い、被害の拡大を防ぎましょう。

- 1 多湿条件において発生しやすいので、下葉を除去し株元の風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
- 2 発病した果実や果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
- 3 予防を主体に、セイビアーフロアブル20(RACコード F:12)等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- 4 [灰色かび病薬剤感受性結果①](#)、[②](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

■ 今月のトピックス ハダニ類

被害について

ハダニ類は、県内の促成栽培いちごにおいて親株から栽培終了時まで周年で発生し、多発すると株の生育不良や果実品質低下等の被害が現れます。

ハダニ類は化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、表1を参考にRACコードの異なる薬剤のローテーション散布を行いましょ。天敵製剤や気門封鎖剤は、薬剤感受性の低下したハダニ類に対しても有効であり、化学農薬の散布回数を大幅に減らすことができるため、積極的に活用しましょ。

天敵製剤(カブリダニ類)の使用にあたって

- 天敵製剤は必ずハダニ類の発生前に放飼する。ハダニ類の発生が多いときは、放飼前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を使用し、ハダニ類の密度を下げる。
- ハウス内をこまめに見回り、天敵が定着・増殖しているかを確認し、状況に応じて追加放飼することで、より安定した効果が期待できる。

気門封鎖剤(物理的防除剤)の使用にあたって

- 直接ハダニ類にかからなければ効果が得られないため、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- 気門封鎖剤の多くは殺卵効果が無いため、卵から孵化した幼虫・成虫に対し5～7日程度の間隔で複数回散布する。



表1 いちごに発生したナミハダニ雌成虫に対する供試薬剤の効果(令和4年度薬剤感受性検定結果)

薬剤名	IRAC コード	壬生町	宇都宮市	栃木市	小山市	足利市	真岡市A	真岡市B
アグリメック	6	◎	◎	◎	△	◎	△	△
コロマイト水和剤	6	○	×	△	△	△	△	○
カネマイトフロアブル	20B	◎	◎	◎	○	◎	○	◎
マイトコーネフロアブル	20D	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎
スターマイトフロアブル	25A	×	×	×	×	×	×	×
ダニサラバフロアブル	25A	×	×	×	×	×	×	×
ダニコングフロアブル	25B	×	△	△	×	×	×	×
グレーシア乳剤	30	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
ダニオーテフロアブル	33	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

<判定基準>「新農業実用化試験(日本植物防疫協会)」の判定基準を引用

◎(効果は高い):補正死虫率95%以上、○(効果はある):85~95%未満、

△(効果は認められるがその程度はやや低い):70~85%未満、×(効果は低い):70%未満

補正死虫率(%)={ (無処理区生存虫率-処理区生存虫率) / 無処理区生存虫率 } × 100

注)表中の記号はハウス単位で採集したナミハダニに対する結果であり、各地域の感受性を反映したものではない。